

カメラ散歩 第1回 (晩秋の昆虫)

11 月もなかば過ぎるとさすがに冷え込んで、虫の音も聞こえず、蝶やトンボも、いつの間にか姿を消してしまい自然界はひっそりとしてしまう。しかし、時には日中暖かく汗ばむような日もある。

そんな日には、咲き残っている、野菊や、この季節の花であるヤツデ、サザンカ、ビワの花などに、動きは鈍いが蝶、蜂、アブなどが訪れ吸蜜に余念がない。

変温動物である昆虫は気温が上がれば体温も上昇、15℃前後になれば活動を始める。といっても活動をするのは成虫で越冬するものたちだけである。寒さが戻り 10℃を切る頃には活動は殆どできなくなる。全く動けなくなる前に、彼らはできるだけ温度変化が少なく、外気に直接曝されないような処へ避難する、例えば枯れ草の生い茂った叢や、落ち葉の重なり合うやぶの中、大木の根際に逃げ込み、寒い冬を耐えて、生き残りを図る。

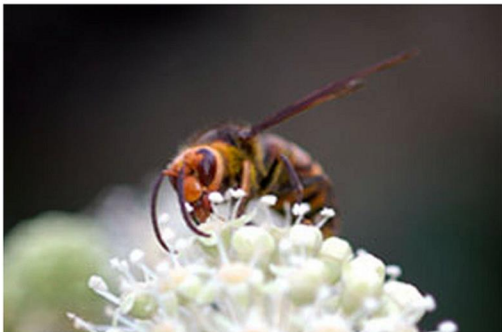
「写真・左下」の野菊の蜜を吸っているスジボソヤマキチョウは標高



500M くらいの里山から 2000 米くらいの高い山までを生活領域にしてい

る。特別珍しい種ではなく、黄色一色の変哲のない蝶であるから格別に蝶への関心がなければ、しかと確かめはしないから、改めて写真でアップを見せられると、「どこか外国のちょうですか？」などと訊ねられることがある。

「写真・右下」は庭木、ヤツデの花の蜜を吸うコガタスズメバチ。活動できる、ぎりぎりまでこうして蜜を吸い、



間もなく朽木の中、崖の干割れた隙間からできるだけ奥まで潜って翌春まで寒さに耐える。無事越冬できたハチは、巣作りを始め、各部屋に卵を一つずつ産み、孵化した幼虫に餌を与え、働き蜂を育てる。働き蜂が一人前になると巣作り、幼虫の世話を始め、家族の勢力は拡大してゆく。

ハチは成虫になると自身は蜜を栄養源としているが、幼虫には青虫や、他の小昆虫を捕らえ肉を咀嚼し肉団子にして与えて育てる。殆どの青虫、イモムシ類は作物などの大敵であるからアシナガバチやスズメバチなどいづれも、農家や、菜園を作っている人々にとって大いに貢献してくれているわけで、貴重な存在である。

カメラ散歩 第2回 (厳冬期の昆虫)

長野地方は例年よりやや早い初雪が 11 月 20 頃ちらつき、冷え込んできました。おおかたの昆虫は越冬態勢に入り我々の目に殆ど見られなくなりました。

ご存知のように殆どの昆虫は、卵、幼虫、サナギ、成虫の四つのステージがあり、そのいずれかのステージで越冬するわけです。

例えば断熱材のような物質で保護されたカマキリの卵はおなじみですね。

よく知られているオオムラサキの幼虫は食樹であるエノキの葉が落ちる前に幹を下って根元の落ち葉の下に潜ります。最もなじみのある、モンシロチョウ、アゲハ、キアゲハなどは、いずれもサナギで越冬します。成虫で越冬するものは、人家の軒下、戸袋の中、天井などにも多く見られます。テントウムシ、カメムシなどがいるのに気付かれています人も多いと思います。

野外では、枯葉の下、崖の土の割れ目、朽木の中、倒木の皮の下など、さまざまなところに潜り込んで寒さに耐えています。写真で一例を挙げてご覧頂きましょう。



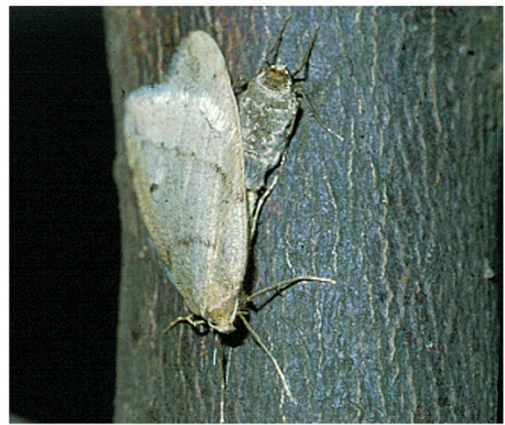
前回、ヤツデの花の蜜を吸っていたスズメバチは、左下の写真のように朽木に自ら穴を穿ち奥深く潜っています。

おそらくマイナス 2~3 まで下りますから、全く動くことはありません。

殆どの昆虫は冬の間、冬眠状態にあるわけです。

中には寒さに適応し、冬に活動する種もあります。右下がその蛾の一種です。フユシャクというグループです。日本には 30 種前後知られています。

メスは低温に耐え得るようにできるだけ体表面積を小さくしてきました。つまり翅が退化しました。実験的にも翅がない方がはるかに低温に強いことが証明されています。写真は翅のあるオスと翅を持たぬメスが交尾をしている状態です。オスの翅の下から右上の方向に身体をのぞかせているのがメスです。専門分野が違えば昆虫学者でも見る機会がないし知ることありません。オスを冬の雑木林で見るとは難しいことではありませんがメスを見つけるのは至難の業です。



カメラ散歩 第3回 (常夏の八重山)

信州の冬は厳しく長い。春が待ち遠しいが、なかなか来てくれない。高齢になって益々気は短くなり春が待ちきれずここ 10 年ほど毎年のように南の八重山、西表島へ出かけ、一足も二足も早い春を味わってやることにしている。去年は個展の年で行かれず、今も、うずうずしているが、腰を痛めたりして未だ実現できないでいる。

八重山は 1~2 月の平均気温が 20℃前後で蝶もトンボも蝉もカメムシも、あらゆる虫たちが一年中発生を繰り返していて恒に昆虫の世界です。

初めて訪れたのが 1969 年 12 月初旬から 40 日ほどの滞在でしたが、セミが鳴き・コオロギが鳴き、ホタルが夜飛び込んでくる、田んぼではカエルが鳴くと言う情況に本当にびっくりしました。チョウの中では王者といってもよい「オオゴマダラ」図鑑でしか見たことがない憧れのチョウとの初対面でした。



日本最大のチョウで、開帳は 12cm、舞う姿はゆったりとしていて、スローモーションの映像を観ているようです。白地に黒のストライプ、そして黒の斑紋のみなのですが、南国のカラフルなチョウに混じっていても全く見劣りが

しません。

八重山行は 14~5 回重ねていますが、その都度お目にかかり大空を飛ぶ雄姿を眺め感動しています。

そして、冬に鳴いていた立派なコオロギは「台湾エンマコオロギ」信州にもいる「エンマコオロギ」よりやや大きく、鮮やかな黄色の帯を締め、しゃれています。



鳴き声はあまり変らなかったように記憶しています。まだ再会を果たしていません。

日本の面積は小さいが、北の北海道から、南は八重山、与那国まで約 2000K に亘り広がっていて、標高差もけっこうあるので、同じ時期でも冬と真夏の差があります。四季を明確に分ける本州も良いが、常夏に近い八重山も魅力的です。

また、八重山は特殊で八重山固有の種が、かなりいる。中でも代表的なイリオモテヤマネコのような哺乳動物すら初めて行った頃の発見で、そのイリオモテヤマネコ調査団にカメラマンとして付いて行き、山猫は撮影できなかったが、珍しい生き物に出会い撮ってきたものの一部を次頁でご覧頂こう。

常夏の八重山 (増補頁)



沖縄・八重山の代表カンムリワシは西表では比較的に見られるようになった、これは我々が彼らの領域まで入りこんだからである。写真でお分かりのように電柱に止まっている姿がよく見られるということである。キノボリトカゲは林に入ればよく出会う。



上のセマルハコガメは、石垣島と西表島と台湾にしかない珍しい陸亀で。腹側の甲羅は真ん中で蝶番になっていて、身体を完璧に隠すことができる。国の天然記念物に指定されている。



干潮の砂浜にはミナミコメツキガニの群れが見られるが近づけば、砂に吸い込まれるように姿を消してしまう。



沖縄本島のホテルらしき建物の軒下で見たクモですが大きさを想像して下さい。化物のようなクモでした。

カメラ散歩 第4回(春の訪れ)

厳しいはずの信州の冬が記録的な暖冬で終わった？川中島ではこの冬の積雪は、トータルで 15～20 センチ程度かと思われる。こんな冬は初めてである。

このまま寒さの戻りが無ければ春は早いことであろう。この冊子がお手元に届く頃には、ちらほら春の花も咲き始め昆虫たちの活動が始まる。

先ず我々の眼につくのは成虫で冬を越したタテハチョウの仲間であろう。中でもキタテハは長野付近では市街地でも普通に見られる種である。

キタテハは正式な和名であるが、黄色というより茶の地色に黒い紋で、どう見てもチャタテハである。

開長（広げた翅の差渡し）5～6センチ翅の周辺がギザギザになっている。

一見翅が傷んでいるように見えるが、同じ仲間の、シータテハ、ルリタテハ、エルタテハなどいずれも翅の周辺はリアス式海岸のようだ。

自然環境の中に溶け込む効果はあるようだ。

地面に翅を広げ日向ぼっこをしているのを見かけるが飛び立たれて気づくことの方が多い。写真は春の花、馬酔木（アシビ）の蜜を吸っている。



越冬のところで記したように他にも成虫で越冬してきたハチ、アブなども姿を見せる。

やがて蛹越冬のモンシロチョウも出現するが、殆ど同じ頃、小さな妖精のような美しいチョウが現れる。



写真が凡そ実物大の大きさなので関心が無ければ見逃すほどの小さなチョウである。和名はベニシジミ。幼虫越冬であるが比較的早くに現れる。

脚は白くバレエシューズのようで、花上をゆっくりと回転しながら時折翅を開き翅の表をみせる。そんな姿は恰も花上のバレエを見るようだ。

幼虫がスイバ、ギシギシを食草としているので田の畦、畑は勿論、庭先にも姿を見せる可愛い春の妖精である。

秋まで2～3回発生を繰り返す。

地中からは働き者のアリたちが巣穴周辺の片づけに忙しい。



カメラ散歩 第5回 (ナミテントウ)

春といえば花見、花見といえば「桜」というのが一般的だが、私は毎年「杏」である。桜ほど、これ見よがしな派手さがなく好ましい。杏の里で保存樹に指定されている樹高が十米を越すような古木には風格がある。

梅、杏に始まり一斉に咲き競う花に追われるような慌しさだが、それは昆虫の季節到来でもある。

草むらではテントウムシが活動し始めた。漢字では「天道虫」太陽神を表す。英語圏ではハッピービートル、或いはレディーバード、いずれも好感を持たれている呼び名で親しまれているようだ。

二十種ほどのグループであるが、概ね黒地に赤い斑紋か、赤地に黒か白の斑紋である。皆さんの身近でよく見られるものは2〜3種でいどであるが、最も多いナミテントウは、斑紋に変化が多い。基本的には、黒地に紅い紋、赤地に黒の紋のバリエーションであるが斑紋の形も数もさまざま、とても一種とは思えないほどの変化がある。おそらく一般で

は別種とされているにちがいない。

下の写真はそのタイプの3例に過ぎないが、専門家によると20タイプほどあるそうだ。

まあ、それはともかく、なんとも可愛らしい存在で、見ていると何故かほっとするものがある。

テントウムシ科の中には、ナス科の作物の葉を食害する、ニジュウヤホシテントウ、ウリ科の葉を食害するトホシテントウが代表で他にはクロウリハムシ程度で、農薬の徹底した洗礼で最近では非常に少なくなった。

去年まで無農薬で6年間、猫の額ほどの小さな菜園をつくっていたが、両種は一匹も見ることがなかった。

結構なことだが同時に、多くの益する昆虫も失っているという事にも思いを致さねばなるまい。

左下の写真はニジュウヤホシテントウ。

上のナミテントウの中の星の数が一番多い左端は19星あるが、いちいち数える閑もなく面倒なので、つまみ殺されてしまう。濡れ衣で



気の毒であるし、人のためになっているのに、その「人」にやられてしまうのは誠に気の毒。先にテントウムシの多くの文様は赤と黒と白の三色で構成されていると記した。害虫である10星・28星も、赤と黒であるが、よくご覧頂くと、害中の方の赤は赤というより濃い橙色と黒であること、そしてややくすんでいて、艶がないので、はっきり区別できます。日本にはテントウムシノ仲間が150〜200種もいるようですが、殆どが味方です。身近で見られるのは、せいぜい7〜8種類程度ですから、よく見て、我々の直接の味方に濡れ衣を着せぬよう区別したいものです。

カメラ散歩 第6回 (ミツバチの蒸発)

養蜂家のミツバチの群れがある日突然消えてしまう謎の現象が4～5年前からアメリカで起き始めた。原因などは謎のままであるがその現象を「蜂群崩壊症候群」と呼んでいるらしい。日本でも同じ現象が報告され始めたという。

最近の新聞で「ハチ足りない・果樹園農家悲鳴」と大見出しの記事を見た。

果樹、野菜の花粉媒介に支障をきたしているということである。



原因のすべてが「蜂群崩壊症候群」のためではない。**1950**年頃からであろうか強力な農薬（パラチオン剤など）の大量使用が始まってから果樹や野菜の訪花昆虫が激減、「人」が花粉媒介をしなければならなくなった。

小さな蜂が身軽に花から花へ舞う姿は絵になるが、人が重い脚立を移動しながら、花から花へ花粉を付けている姿はあまりカッコ良いとはいえない。花粉媒介作業をしている農家の方に叱られるかも知れぬがその姿は滑稽であり、皮肉の極みである。

1960年頃からか、細い竹や葦の筒穴に営巣するツツハナバチを花粉媒介に使うことを考えた研究者が、果樹園のあちこちに、葦の束を置き、蜂に巣穴の提供をして蜂を多数誘致することを考え試験した

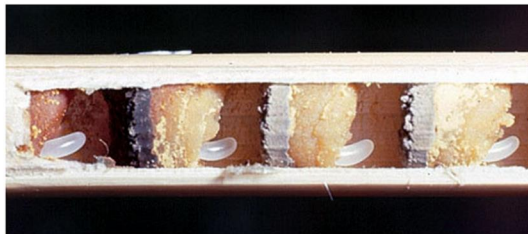
ところ大いに効果があり、ツツハナバチは増え、その方法は今でも実施している果樹園もある。

写真は葦の筒穴に花粉、蜜を運び込むツツハナバチ。穴が泥で塞がれているのはすでに完了した幼虫の育房。



写真下は育房の断面。

花粉だんごに卵が生みつけられている。卵をひとつ産み付けると、泥で仕切って次々と房を作り産卵していく。孵化した幼虫は花粉団子を食べて成長、蛹を経て来春になってハチが生まれてくる。



自然界ではこのような事が普通に行われ花が咲けば放って置いても実は結び、人手をかけることもなかったが、**1965**年頃から受粉に人手が欠かせない状態なのである。

農家には高齢化の問題もあり、人工授粉作業も思うに任せず、成り行きに任せている農家も増えているようだ。今日も近所の果樹園を見に行ってみたが、確かにミツバチは少なく殆ど見られなかった。

自然からの、しっぺ返しであろう。

カメラ散歩 第7回(オオルリシジミ)

蝶の美しさに惹かれ、標本箱のコレクションが増えることを単純に喜んでいて時代があった、中学時代である。

その頃、稲荷山に住んでいて毎日のように捕虫網を持って里山を駆け巡り蝶を追いかけていた。

ある日図鑑でしか見たことのないオオルリシジミを見つけ捕虫網に収めた。

珍品であることは知っていたので興奮した。今でもその場所、状況を明確に記憶している。

今改めて図鑑を見ると、凡そ以下のような記載がある。

長野、群馬、東北各県、九州阿蘇山に分布するが局地的である。

年一回の発生で分布が局地的であるから、出会うことは少ないのは当然であるが、それ以後、昨年の6月まで60年間、会っていなかった。

昨年6月、上田市で行われた美術教育の研修会「アートセミナー」に参加、およそ40年ぶりの先生方にお会いした。30代から、一気に70代と年はとったが気持ちの若さと熱さは40年前と少しも変わっていない。午後、東御市の八重原地区にある「梅野記念美術館」へ行く。館の前の池の傍を歩いているとき、大きな石の上になんと、オオルリシジミがいるではないか。60年ぶりの再会である。

とりあえずカメラに収めた。

60年前はカメラは持っていませんでしたから、初めてカメラに収めたわけである。



それにしても翅はぼろぼろ、うらぶれた姿我身と照らし合わせて思わず苦笑してしまった。

東御市がオオルリシジミを保護していることを思い出し、地元にお住まいの40年ぶりの深町先生に伺い事情が分かったので数日後に出直し、保護に協力している、シチズンの敷地へ先生に案内して頂いた。発生最盛期は過ぎていたが、それでも美しい新鮮な個体に会うことができた。

食樹であるマメ科の「クララ」の花の蕾に盛んに産卵をしているのを収めることができた。



実物は写真よりやや大きく、シジミチョウの中では大型種。

翅の表は黒っぽい縁取りがあるが全面瑠璃色に輝いている。裏もご覧のように洒落た彩である。

食樹にクララ一種のみ選び、且つ花びらしか食べないという習性も絶滅危惧種に追い詰められている要因の一つかもしれないが、里山、河川敷、野原などに自生していたクララが開発や、河川の改修などで、殆どなくなってしまったのが大きな原因であろう。

しかし、数年前からの保護、飼育、などにより、東御市の八重原を中心に、かなり回復しているようだ。市では天然記念物に指定し今後も保護政策を続けるようだ。

大変嬉しいことで、協力をしている研究者企業、一般の市民の方々に大きな拍手と声援を贈りたい。

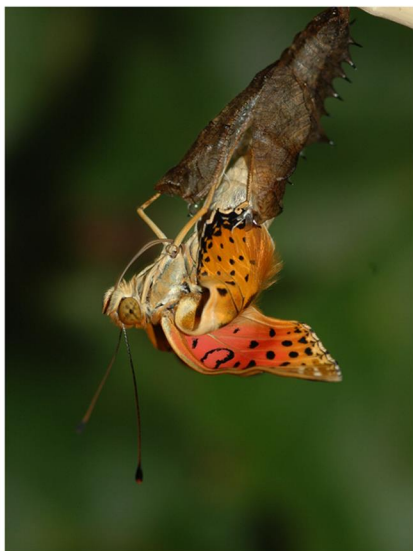
カメラ散歩 第8回 (温暖化)

昆虫の生態を見せる昆虫館に 10 年近く勤めていて、さまざまな昆虫を飼育していたが、現在は、たまたま見つけたチョウの幼虫を飼ってみる程度である。

撮影はあくまで自然の中で撮るのが理想であり、自然の状態でなければ撮れないものが殆どである。一方、チョウやセミ、トンボなどの羽化の瞬間といった長時間待たなければならぬものは、飼育してカメラをセットして、その瞬間を待つよりし方がない。

サナギの外観の変化を見ながら凡その見当をつけて準備万端整えて待つ。羽化は多くの場合、その夜、夜中、明け方である。待つうちに眠くなり、居眠りをして、はっと気付いて目を覚まして見たら、既に羽化が完了していて、悔しい思いをしたことも度々である。

しかし、経験を重ねていくうちに、サナギの変化の細かいところまで観察が行き届くようになり、羽化までの時間がかかり的確に判断できるようになり失敗は少なくなった。大変ドラマチックな瞬間で、何度経験しても感動的な場面である。



上の写真がツマグロヒョウモンの羽化のクライマックスである。

セミの羽化をご覧になった経験をお持ちの方はかなり多いと思うが、チョウの羽化になるとやや少ない。

幼虫である、イモムシや毛虫が蛹になるプロセスの目撃となるとかなり少ないと思われる

ので、ここで幼虫から蛹になる、蛹化というプロセスの写真もご覧頂こう。

昨年夏、信濃鉄道の御代田駅ホームで見つけた、チョウの幼虫を持ち帰ったところ、翌日サナギになった。下の 4 点の写真は、そのプロセスを撮影したものである。



飼育容器の中で、黒と赤の毛虫が逆さにぶら下がる。やがて毛虫の背が割れ徐々に蛹が現れてくる様子である。蛹化の所要時間は 2~3 分であろうか。

蛹化、羽化いずれのプロセスも巧く撮れたのは大変ラッキーといわねばなるまい。

このツマグロヒョウモンは本来暖地性の種で、昭和 41 年発行の（保育社）の図鑑の記載には、本州西南部以南に分布とある。静岡、神奈川で稀に迷蝶として採集記録が見られる程度であったが、ここ数年、東京付近はもとより、信州でさえ当り前に繁殖、目撃されるようになった。温暖化の影響と思われる。

今年の春先友人から、庭先で越冬幼虫を見つけたと報告があり、確認した。地球規模の温暖化、異常気象の警鐘として捉えるべきであろう。

カメラ散歩 第9回 (トンボ)

日本の面積は小さいが列島は南北に長く連なり、標高差もあるので昆虫の種類は多い。しかも、嘗ては至るところに清流があり、大きくはないが湖水、田の用水、庭園の池などなど、とにかく水に恵まれていたので、トンボの王国でもあった。しかし、水の汚染、都会化の波に飲まれトンボの棲める環境は著しく減ってしまった。

子供の頃牛込区（現在の新宿区内）に住みながら、夏の夕方の原っぱの上空はヤンマ類が群れ飛んでいた。それを捕らえようと大勢の子供たちが長いもち竿（釣竿に鳥もちをつけたもの）を持って集まってきたものである。

現在の都会では全くそのような風景は見られない。

信州は未だ恵まれていて、春から秋まで水辺では多くの種類のトンボが見られる。春先には体長3センチほどのイトトンボ、から始まり4~5センチの、おなじみのシオカラトンボ、アキアカネなどの赤トンボの仲間、ハラビロトンボ（下）そして大型のギンヤンマ、流れのある水辺には、ハグロトンボ、カワトンボ、超大型のオニヤンマなどがまだまだ見られる。



トンボはいずれも頭部の殆どを占めるような大きな複眼を持ち常に目を光らせて獲物を狙っている。

止まっても頭を上下、左右に動かし周辺に注意をはらっている。

頭だけにある程度自由に動かせるのは、カマキリ、ハチなどと共に、生きている他の小昆虫などを捕食している昆虫だけの共通の特徴である。

赤トンボの類は種も多いのでさまざま目にすることができる。

一方ハグロトンボの姿は殆ど見られず水辺がちょっと寂しく感じていたが、何故か今年は団地を流れる、せせらぎに比較的多くのハグロトンボが認められようになり、早速カメラを持って出かけた。



水草の上で翅の開閉をするがその瞬間、瞬間がハグロトンボ独特の形に決まり美しい。複眼はやや小さいが左右に飛び出した形に愛嬌がる。

9月に入って、千曲市の歴史館へ誘われ出かけていった。

休憩に入った喫茶店の池で大きなギンヤンマの雌雄が産卵をしていた。その日はサブカメラしか携行しておらず、指をくわえて見ていただけで残念な思いをした数日後時間ができたので再度訪れた。

大きな期待はしていなかったが、やはりペアーのギンヤンマが産卵に来ていた。見ていると別のオスが盛んに産卵中のペアーにちょっかいを出していた。その都度オスが追い払う、そんな状況を観察しながら撮影ができた。オスは雌の産卵をサポートしている。（オスが前）



カメラ散歩 第10回 (渡りをする蝶)

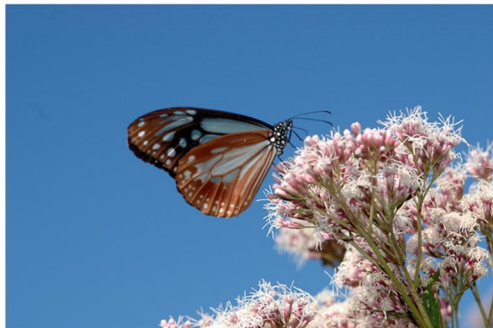
8月に市役所川中島支所の隣の川中島地区有線放送のギャラリーで生態写真展を開いた折に第8回でご紹介した、ツマグロヒョウモンの幼虫を、本冊子の編集に携わっておられる轟 博子さんが「庭のパンジーにいたから」と会場へ届けてくださった。すでに蛹になる直前の状態であつたので翌日には蛹になった。

会期中会場の受付に置いてあつたので、多くの方々が実物の蛹を見て昆虫に対する関心が大いに高まったようだ。その後も、轟さんから鉢植えのスマレに産み付けられた卵や小さな幼虫を頂いて家で飼育していたが、幼虫を飼ってみたいという方、数人にお分けした。幼虫から蛹、蛹から蝶への劇的な変化のプロセスを実際に見た方、その瞬間は見られなかったが、幼虫が蛹に、そして綺麗な蝶が誕生しました。といった報告を皆さんから頂いた。

どなたも大変感動されたと、喜んで下さった。

そんなことがきっかけで、周辺に「虫愛する姫」が数名誕生、私も大いに気をよくしている。この場をお借りして轟さんに御礼申し上げる。

その轟さんが9月の中旬になって、渡りをするアサギマダラを今年は是非見たいとおっしゃるので、大町市の中綱湖畔へごいっしょした。予定した日があいにくの天気で見られず20日に再度出かけて行き、目的を果たした。



アサギマダラは翅を広げると10センチほどの中型の蝶。
他の蝶に比べて鱗粉が非常に少なく、捕

らえても殆ど手に鱗粉が付かない程度である。

飛び方は、ふわり、ふわりと優雅で力強さは全く感じられないが、この蝶の渡りについての調査が盛んに行われるようになり意外なデータが集まり始めている。沖縄の最南端の波照間島にいる知人から数年前、翅に「松本」のマーキングのあるアサギマダラを見つけたとメールをもらったことがある。約2000キロである。最近では台湾まで渡った記録もあるようだ。風や気流を上手に利用して飛翔していくのであろうが、この蝶のどこにそんなエネルギーがあるのだろうか？不思議である。

調査では飛距離だけでなく、所要日数、飛翔コースなども少しずつ分かってきているようだが、渡りの目的などは謎のままである。

調査のためのマーキングは下の写真のようになされている。



アサギマダラは東京高尾山で幼虫越冬を確認しているから、なにも沖縄、台湾まで南下する必要はないように思うのだけれどかなりの固体が南の果てまで渡っているのも事実なのである。

アサギマダラの北への生活圏拡張も旺盛で従来生息地の北限は東北地方であつたが今では函館山で多くのアサギマダラが見られるようになったそうだ。

これも温暖化の証である。というより警鐘と受け止めるべきである。

カメラ散歩 第11回 (スズメガ)

世間には白髪の爺さんなど珍しくないはずなのに何故か目立つようで近隣の子どもたちは珍しい生き物でも見る目をして恐る恐る私を観察している。勇気を奮って大きな声で「こんにちは」と声をかける子も稀にある。

それが8月の展覧会以降、有線放送の宣伝のためか、気軽に「虫博士」と声をかけてくるようになった。

先ごろ数人の女子小学生に呼び止められ、飼育容器ごと渡され、「これはなんでっすか」と聞かれ、覗くと大きな芋虫が5〜6匹入っていた。

「家の朝顔に」ついてたという。

スズメガというジェット機型の蛾のグループがあり、その一種の幼虫であることは知っていたが正確を規すために調べようと預かって帰ろうとすると、ぞろぞろ皆ついてきて部屋まで上がってきて大騒ぎ、夕方まで帰る時間だからまた来ると言って帰っていったが、その後日も違う子どもたちも含め、「何か虫を見せて」と訪ねてくる。

その芋虫は有難く頂いて飼いはじめたが、体長6〜7センチもあり、朝顔の葉を、食べる事食べる事、我家のベランダに残っていた朝顔は一日ももたず、その後は、あちこち探して歩く始末であった。嫌いな人が多いかもしれないがご覧頂こう。本誌がモノクロなのが幸いかもしれない。葉がなくなって蔓をを齧っている、エビガラすずめの幼虫である。

数日後には容器の中の土中にもぐりこん



でしまった。

蛹になる前に土中にもぐり、蛹化し来年

の夏まで蛹で過ごす。

朝顔と同じ仲間のサツマイモの葉も食べるので、秋、畑を耕している折に見たことがあるという方もあるはず。



蛾として大型の部類ですから蛹も大きく小指ほどあります。

昔、蛹を見つけた子どもたちが、そっと指で持ち、腹を上の方へ向け、「西はどっち」と蛹に問いかけながら、微かに指先に力を加えると「蛹の腹部がくるっ、くるっ、と動き先端があちこちを向く。これといって玩具も無い時代の子どもの玩具でもあったわけである。

「西はどっち」は実際には「にしゃあどっち」と聞こえたが、現千曲市辺りでは「にしゃあどっち」が、そのまま、土中の蛾の蛹の総称になっている。ついでのことに成虫のジェット機もご覧ください。



羽化したばかりの横からの姿で、シャープな形でないが、数時間後には立派なジェット機になる。

カメラ散歩 第12回(写真展)

8月に地元の有線放送ギャラリーで写真展を催したことは第10回で紹介させて頂いた。大勢の方々に観て頂いた喜びと同時に、事前の準備、事後の整理など、虫の季節に撮影に出られない焦りが一方にあり、終わって、さあこれから写真をとっていたら、11月に八王子で展覧会を開くよう、友人から10月に連絡が入ってきた。

この友人はALSという難病であるが、奇跡的に進行がおそく今のところは、日常生活にさほどの支障はない。時々検査入院をする。数年前病院で、昆虫の大好きな先天性筋ジストロフィーの少年と同室になり、お兄ちゃんと慕われるようになり、昆虫の写真を送ってあげてくれないかと紹介があり、それ以後毎月、昆虫の写真のカレンダーを作って、送って差し上げていた。その彼は重度の患者さんで、もう数年前から寝たきりの生活で、移動はストレッチャーであるから、なかなか困難である。

その彼「慎太郎君」に写真を観てもらおうと、彼の住むなるべく近くで写真展ができないか、会場を探して欲しいと、友人にこの春依頼しておいたことが実現の運びとなったわけである。

会場は慎太郎君の住む府中から車で30分ほどの距離ではあるが、移動は充分可能であるということで実現した。

八王子市の南東に位置する「長池公園」のネイチャーセンターという施設で

「長池公園芸術祭」に、友人下村氏の住む団地自治会主催の形で催された。



(写真は初日にご両親に連れられ無事来場。
嬉しい慎太郎君とご両親)

内心の主目的は慎太郎君に観てもらいたい、見せてあげたいということであったが、幕を揚げたら、予想もしなかった盛況にびっくり。前日下見にみえた先生に引率された小学生をはじめ、疎遠になっていた在京時代の友人知人、ひっきりなしのお客様に食事する時間もないありさまであった。



(小学生に話をする筆者)

この地は元々は、多摩丘陵と呼ばれていた長閑な里山であった。

現在は多摩丘陵の全貌は跡形も無く、多摩センターを中心に開発され10階～20階建てのマンション、集合住宅が林立している。

そんな中でおそらく湿地で居住区に適さず、結果として開発の波に飲み込まれることなく公園として残された地域であろう。

自然公園として20haほどある。狭い日本では20haといえば広い公園ではあるが40～50年前は多摩丘陵全体が「自然公園」の佇まいであったことを思うと複雑な思いである。

開催にあたって、会場の申し込み、交渉、宣伝用のポスター製作、配布、解説書のコピーなどなど全て、難病である友人、下村氏にお世話になった。また同じ団地に住む仲間たちにも大いにご協力頂いた。

感謝、感謝である。

更にたった今、来年6月30日～7月19日、長池公園の自主事業として写真展の依頼が届いた。数日後には宇治での開催も決まっており夏は忙しくなりそうである。

カメラ散歩 第13回 (寅年に因んで)

2010 年を迎えたわけであるが、わが国では未だに元号と西暦を併用していて、紛らわしいというより煩わしい。なくした方が良いのではないかと常々思っている。

そんなことを言いながら一方では「干支」或いは「十二支」には関心がある。

干支はある意味で便利で、相手の年齢を直接尋ねるのは憚られるが、何気なく十二支を尋ねるのは抵抗が少ない。

賀状を毎年たくさん頂く。若い層からの賀状は家族写真を撮ったものが多いが

その他は十二支に因んだ動物の絵柄が圧倒的に多いことから十二支は日常的にも使われていると思ってまちがいない。

今年は「寅年」である。寅は「虎」なので、虎に因んだ昆虫に顔見世をさせようと思う。冠にトラ或いはトラフ（虎斑）と付けられているものは数多ある。

先ず、トラフシジミ



次にトラマルハナバチ



いずれも、翅、或いは体色が虎を連想させる色彩、紋様をしている。虎の紋様の生き物が多いのは身を護るための「迷彩」といってよかろう。

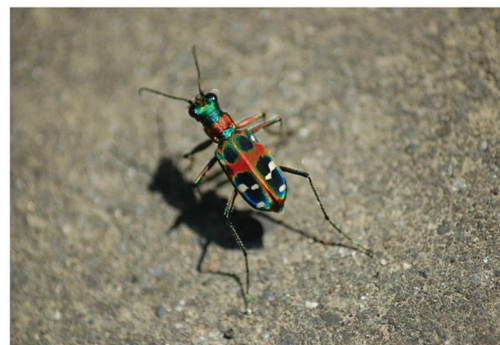
こうして写真で切り取ってみると迷彩どころかかなり目立つように見えるが、自然の中で見れば迷彩の効果は歴然としている。写真を撮っていると良くわかるがたいていの場合見つける前に飛び立たれてしまって逃すことのほうが多い。

虎の親戚だから登場させるが「豹」の紋様にそっくりなのが、そのままの名が付けられている、ヒョウモンチョウ（豹紋）の仲間。その一種ツマグロヒョウモン。



鮮やかな豹柄の衣装でこの蝶に関しては人の目には目立たないとはいえないかもしれないが、敏捷な飛翔力でカバーしているのであろうか。

次のハンミョウ（斑猫）は色彩から付けられた名前ではない。虎のように疾走して生餌を捕らえるところからである。



宝石のように美しい色彩のハンミョウは英名が、タイガービートル。英名から「ハンミョウ（斑猫）」と命名されたのか、偶然同じような連想からなのかは定かでないが、虎のいない日本では、やはり「猫」なのかもしれない。

カメラ散歩 第14回 (昆虫の顔)

一昨年 11 月から連載を始め、凡そ季節を追って記してきたので、冬の虫のようすなども一応ご紹介したので冬の題材に困る。というわけで今回は昆虫たちの「顔」をご紹介しよう。特別関心の深い人種以外は昆虫の顔などルーペで覗いて見るることなどないはずですが、おなじみのトンボくらいはよく御存知でしょうがそれでもルーペで覗くことはないでしょう。早速く覗いてみましょう。



頭部の半分くらいを複眼が占めています。これは、飛翔することと、生きた獲物を捕らえるのに必要で、そのように進化してきたと考えられています。実際、他の種でも、同等に複眼は大きく、よく発達しています。もうひとつ例を挙げてみましょう。



カマキリもやはり大きな複眼をしています。この 2 種は、頭部だけを自由に動かすことが

出来る数少ない昆虫です。これも生餌を捕らえるのにより有利だからでしょう。飛翔にも大いに関係があり、ウシアブなど超スピードで飛翔する昆虫も大目玉を持っています。ご覧のように頭部の 90% は目玉です。



一方、草食の昆虫の目は小さくなく、頭部を占める割合は僅かです。草食の代表格のバッタはこんなものです。おそらく、バッタにと



っては、視覚より嗅覚の方が大事なのでしょう。昆虫の顔と言うより複眼の大きさの話になってしまいましたが、顔の形にもそれぞれ必然もあるのでしょうか、こんなユーモラスな顔カマキリのように

うな恐ろしげな顔もあり、変化に富んでいてルーペで覗くと結構楽しいものです。特にカマキリは表情豊かで喜怒哀楽までよみとれるような気がしています。それも顔だけを自由に動かすことが出来、時には後ろを振り向くことさえできるからかもしれません。カマキリに限らず友人知人に多分、似ている人が一人や二人あるはずです。

カメラ散歩 第15回(ナナフシ孵化)

この原稿を書いている時点で善光寺平は桜が咲き始めた。芭蕉に「さまざまな事おもい出す桜哉」と言う句がある、芭蕉だから名句だとすれば遺憾という意味のメールが月初めに友人から来た。私は俳句の良し悪しを云々できる柄でないし、論じる場でないでそれには触れないが、この句を見て、突然ナナフシを思い出した。桜でナナフシを思い出す人は皆無だと思いつつナナフシをたくさん飼育して発見したことはメスだけでも、どんどん増えること。つまり単為生殖も可能な昆虫であること。それも驚きであったが、飼育して初めて卵、そして孵化のようすを見ることができ、カメラにも収めることが出来たことである。下の写真が孵化の瞬間である。



中央の植物の種子のようなのが、卵、大きさは3ミリ×2ミリ×厚さ1ミリくらい。卵から体が出て、あと3対の脚を抜きにかかっている状態で一休みという状態。ついでに成虫の画像もご覧下さい。



バッタ、カマキリの類と同じ直翅目に属しているがカマキリとは異なり草食である。。

何故桜の「句」で思い出したかというと、飼育の経験から桜の葉が大変好んで、特に孵化したての幼虫は柔らかな桜の花びらが大好物。顔中花粉だらけにして食べている可愛らしい様子が思い浮かぶからである。その画像が見つからずお見せできないのがちょっと残念である。やや遅れてカマキリも孵化し始める。早速画像をお見せするが、皆さんが良くご存知の卵囊とちょっと違います。ハラビロカマキリが卵囊から生まれ出てくる場面。



ラグビーボールを縦半分に切って伏せたような形で黒褐色の硬い卵囊で中央の盛り上がりには襞がありその隙間から一匹ずつ生まれてくる。つぶらな瞳で誠に可愛らしい。孵化や羽化などの写真は屋内で飼育しない限り撮影は難しいので、秋から冬の間に木の枝などに付いている卵囊を、いくつか採集してきて乾燥しすぎないように注意して春まで保存するわけであるが、うっかりしていると、ある日家中小さなカマキリさん、ということになり、家人に叱られる、しかし誠に可愛らしい姿であり、被写体として最高であるからやめられない孵化してから、脚がしっかりするまで葉裏などで、じっと待っている。このような状況もまた可愛らしく絵になってしまう。



カメラ散歩 第16回 (キバネツノトンボ)

昆虫は種によって年 1 回だけ発生するもの、年に 2 回、更には数回発生を繰り返すものなど、さまざまである。

年 1 回発生する昆虫は発生時期が決まっています、その年会えないと翌年まで会えないことになる。それだけに特定な時期だけに現れる種は私の頭の中で季節と結びついているので、その頃になると心待ちしていて、野山でめぐり会ったとき、「やあ、久しぶりだね」と、つい声をかけてしまう。写真は年一回 5～6 月に出現する「キバネツノトンボ」(交尾中)



ツノトンボと名付けられているが、トンボの仲間ではなく、カゲロウ、クサカゲロウに近い。5～6 月の平地、低山の草原をかなりのスピードで飛び回っている。カゲロウの類で、このスピードで飛び回るのはいない。時々草に翅を休めるが、なかなかシャッターチャンスがくれない。この季節は一年のうちで最も好

みの季節だから野山を歩くのが格別楽しいが、いがぐり頭で大きな目、なんとも。やんちゃな顔をしているツノトンボのに逢えるのも楽しみのひとつである。

キバネツノトンボは、平地の広々とした草原がなくなり、だんだん山地に追いやられてきているような気がする。

一昨年は東御市で、逢えたが、その折は写真のように、小枝に産卵中であった。



産卵中に出会ったのは初めてであるが、夢中で産卵しているので近づいても逃げることもなく、ゆっくりとカメラに収めることが出来た。

卵は数列にも、ときに小枝をとり巻くように産み付けられる。

孵化した幼虫はアリマキや他の小昆虫などを食べている。幼虫はウスバカゲロウの幼虫と同じような姿をしていることは知っているが、肉食の昆虫は飼育が難しく、飼ったことがないので蛹にはお目にかかったことがない。

キバネツノトンボは、ひっそりではなく、大手を振って、活発な生活をしているが、殆どの人に知られず、捕虫網に追われることもない幸せな昆虫である。

これから秋まで野山ではさまざまな昆虫たちの営みが見られ誠に楽しい季節である。

カメラ散歩 第17回 (オトシブミ)

「おとしぶみ」という言葉、或いは、そんな名前の昆虫がいるということをご存知の方は少なくないが実物を見て知っている方は、ずっと少なくなる。オトシブミの造った揺籃を見知っている方は更に少なく、揺籃造りのプロセスを目撃している方は殆ど皆無であろう。

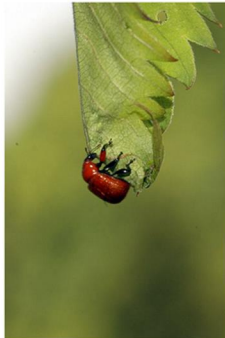
それは当然のことで、数種類いるがいずれも 10 ミリに満たないような小さな昆虫であるし、この忙しい世の中である、そんな暇人はいない。

毎年野山で時には団地の中でも出会うけれど、揺籃つくりの場面にはなかなか出会えない。5月末、松代の集落からちょっと山に入ったところで運良く揺籃つくりを最初から見る事ができた。本種は体色が濃いオレンジ色の5ミリほどのリュースアシナガオトシブミという種でニレ科の若葉を揺籃にしている。

下左は葉の付根近く左から切り込みを終えたところで一休み。下右、やがて葉の裏に回りこみ三対の脚で葉を挟み込むようにして葉を縦に折、葉脈をかるく噛みながら先端へむかって降りてゆく。



やがて先端まで行き、葉を巻き始める。(下左) 更に少し巻き上げた (下右) ちょっと目を離れた



隙に姿が見えなくなりがっかりしたが、暫くして

姿を見せた。二つ折りの葉の中へもぐり産卵をしてきたらしい。

手際よく巻き上げの作業が続く。

小さな彼女には大変な作業だと思われるがなかなかの手際で感動しながらこちらも作業を続ける。下の写真はいずれも葉の縁の切れ込みのある部分の中へ中へとたくし込むようにしている。仕事は大変丁寧。感嘆のひとつこと。



完成間近。下左をみると

二重に折られた内側の葉にたるみが出来ている。その弛みを次の場面 (右) で折り返している。これで巻いた葉が戻らないというわけである。



口器が鋏の役を為しているが、接着剤も、ホチキスも無しで良くどこまで器用に揺籃がつくれるものと感動。この揺籃は産み付けられた卵が孵化し、幼虫の家であり、食料でもある。こんな高度の技がDNAによって伝えられていることが誠に不思議である。最後の画像は揺籃が切り落と



される寸前である。

カメラ散歩 第18回(子煩悩な虫たち)

4月に「アフリカを食べる」の著者、元朝日新聞ナイロビ支局長の松本仁一氏の話「アフリカの食から異文化を考える」を聴き、我々信州人もびっくり。その中でカメムシが意外に美味しかったと話された時、聞いている人の顔は複雑であった。私自身かなりゲテモノを食べた経験があるが、あの悪臭のあるカメムシは食いたいとは思はない。しかし虫屋として、機会があったら地元産のカメムシで一度は試してみたいと思っている。

さて、そのカメムシであるが多くの種は成虫で越冬し、春先から活動が始まる。

カメムシは大きな梓ではセミと一緒に有物目に属している。つまり親戚で、木や草の汁を吸っていることは共通だが、その他の生態、習性はかなり異なる。

カメムシのかかなりの種は、幼虫が幼い時期、親が子を守る習性を持っていることと、産卵の規則性が見られることである。



上の写真はその代表的なモンキツノカメムシ。腹の下に孵化したばかりの幼虫を抱え込みアリや他の攻撃から護っている。武器はあの悪臭、毒ガスである。純粹に自衛のためだけの武器である。右上は、同じ仲間であるが水中生活をしているコオイムシ。卵の期間だけオスが卵を背負ってというか、メスに背中一面に産み付けられ、背負わされて、結果として卵を護っているわけである。次に産卵の法則性であるが、多くの例を見て完璧なまでに例外の少ないのは、下の写真のナガメの産み付け方である。



二列に12個（1ダース）産み付けられているのが卵。卵の周りにいるのが孵化したての幼虫であるが、この産卵の規則性から外れたものは殆ど見たことがない、数も全く正確で間違いは無い。



昔りんご園で、菱形に16個か24個、きれいに産み付けられたカメムシの卵を見た記憶があるが、数までは記憶が明確でない。そこで調べてみた結果、菱形のは無かったが、殆ど正六角形に産み付けられている、アオクサカメムシの画像をみつけた。正六角形をじっと見つめているうちに菱形が三つうかんできて、六角の中に納まった。ひょっとしたら菱形を見たのは産みつけの途中であったのか？などと考えてしまった。尚、卵の数は60-70と記載されていた。いずれにしても几帳面な産卵習性である。今年はアオクサカメムシを飼育して解明してみようと考え始めている。

カメムシは悪臭で嫌われているが、その悪臭はあくまで自衛のための武器であり、卵や子を守る親の様子は健気でさえある。多少作物に被害を与える種もあるが、子煩悩なカメムシ類をちょっと見直していただきたい。

カメラ散歩 第19回 (ヤンマ2種)

八月一日、七～八人の親子連れの昆虫観察会の案内をして、信州中野近くの替佐城址公園へ行ったが数年前と大分変わってしまい、立ち入り禁止になっていた、思うところへ案内も出来ず戸惑ったが、何処でなければならぬということもないので、城址公園の麓で観察会をした。昼食の折にやや蔭のあるところへシートを広げ休息をしていると、盛んに大きなオニヤンマが行ったり来たりパトロールをしているのに気づき観察していると前の開けた草原の枯草に止まった。早速そっと近づきカメラを向けたが逃げられた。じっとして戻ってくるのを待った。案の定戻ってきて止まった所を捉える。



ヤンマ類は縄張りのパトロールが忙しくなかなか翅を休めることがなく、こうした場面も簡単そうでカメラに収めるのは簡単ではない。小三の男の子もデジカメで上手に捉えていた。

日本は水に恵まれた国でトンボ王国といってよいほど種類は多いがトンボの生息環境は狭められつつあり、トンボ王国としては真に心もとない現状ではある。数年前、上京した帰り、地下鉄丸の内線で東京駅に着き降り、足元を見ると、ホームになんとヤンマが翅を広げて休んでいた。ヤンマを保護すべくしゃがみこん

で、人波が過ぎるのを待ち、常に首にさげているカメラに収めた。ひょっとして



既に死んでいるのかと思って手を出したらあっさりと飛んで行ってしまった。新幹線に乗ってから、何故ヤンマが地下鉄構内へ、何処の駅から乗車したのか、頭の中で推理が始まっていた。

いわゆるアカトンボの類でも、シオカラトンボなどポピュラーでないヤンマであるし？・・・丸の内線が地上に出る四谷駅あたりが最も可能性がありそうだと推理した。何もしらず乗ってしまい、とんでもない地下数十メートルまで連れて行かれてしまったヤンマはあの後どうしたろうか、こんどはそれが気になってきた。しっかり捕まえて地上にいっしょに連れ出してやればよかったと考えたが既に手遅れであった。

家へ帰って早速大きい画像でみると、なんとウチワヤンマだと判って二度びっくり、それほどの珍品ではないが、長年昆虫の写真を撮ってきた私のファイルにない種であった。

十数年前までのローカル線では無賃乗車の昆虫たちが結構いたもので、そんな折にはたいていカメラに収めてあるが、最近のように窓の開けられない車両では、そんな楽しみがなくなってしまった。

カメラ散歩 第20回 (秋の楽師たち)

数十年ぶりと言われている暑い暑い夏も漸く終わろうとしている。

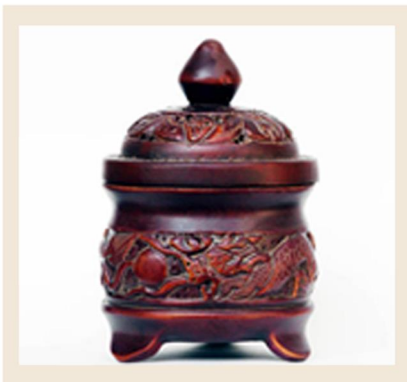
草むらではコオロギ、カンタンがさかんに聞かれるようになりほっとしている。

コオロギと単に呼んでいるが 5~6 種類は鳴いている。エンマコオロギ、オカメコオロギ、ミツカドコオロギ、ツツレサセコオロギ、タンボコオロギなど、それぞれが違った歌を歌っているが、カタカナ表記のとおり聞こえぬことも多く、聞き分けるのは難しい。

近い仲間のスズムシは昔から多くの人々に親しまれていて、屋形舟の形の虫かごや、壺などで飼われていたが、最近ではガラスケースの容器が多いようだ。下の写真は羽化直後のスズムシのオス。



一方中国ではコオロギがよく飼われていたようである。



昔の中国人は写真のような容器を懐に入れたり、寝室において楽しんでたと父から聞いたこと

がある。

蓋が透かし彫りで中の暗さがちょうど良く、よく鳴く。虫の声を楽しむのに、趣もありなかなかよい器である。

鳴く虫の中で、その音色のよさを珍重されているカンタンは信州には多い。ちょっと山手の家の庭などでも聞くことが出来る。「ルルルルルル・・・」と、邪魔が入らなければ、5分でも10分でも連続して聞こえてくる。

秋の鳴く虫のチャンピオンと呼ばれ東京あたりではカンタンを聞くツアーまであるという。

姿も繊細で美しい。スズムシをやや細くした体型で淡緑色、体長は20ミリ弱。



なかなか敏感で人の足音が近づくとぴたりと鳴くのを止めてしまい鳴いている姿を見つけるのは至難の業で未だに鳴いている姿をカメラで捉えていない。

秋を楽しませる楽師は数多くいて、音色、姿、いずれも甲乙つけがたいが、姿だけに限って言えばツユムシに軍配を挙げたい。



花びらを好んで食すので花上でよくみられる。舞台も最高である。絵になる被写体である。

しかし、音色は非音楽的に「ジー・ジー」と鳴くだけである。庭や草むらに出て耳を傾け秋をお楽しみ下さい

カメラ散歩 第21回 (復刻の喜び)

「ふゆのむし」と題した絵本の物語を書き、三芳悌吉さんの絵で絵本を福音館から出版したことがる。

その物語を書いたきっかけは、子どもたちの多くは、昆虫が好きなのに、目の前から消えてしまえば冬、虫たちがどうしているかということに考えが及ばないことに気づき、冬の虫にも興味をもってもらいたいと思って書いた物語である。

福音館が月刊「かがくのとも」をスタートした年（1969年）の12月号であるから41年前である。それから15年ほど経って、ハードカバーで再版された。そして今年「かがくのとも」の500号記念に中から50冊が選ばれセット本として当時のままの姿に復刻され10月に出版された。

これは、絵を描いてくださった三芳悌吉氏のすばらしい「絵」のおかげであることに重々感謝しているが多少の自負もある。

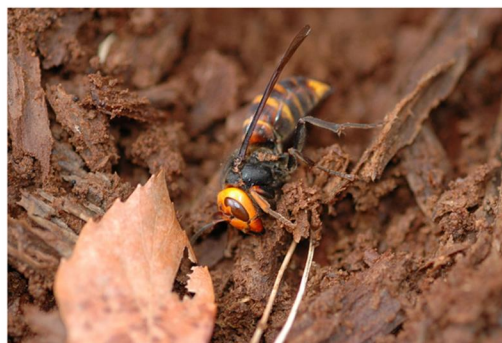
いずれにしても、40年以上も、書いた本が読まれ続けていることに喜びを感じている。



物語は、主人公の「こういち」の飼っていたクワガタムシが秋の終りに逃げ出してしまう

い、それを探しにクワガタを捕らえた雑木林に出かけて行き、さまざまな越冬昆虫の姿に出会い、最後にクワガタムシとも再会できたというお話である。

昨年の3月、東御市の美術館の敷地内で子どもを中心に大人も参加「ふゆのむし」の観察会を行った。最初はあまり興味はなさそうだったが、朽木の中から一匹スズメバチの越冬しているのを見つけてからは、大人まで夢中になってあちこち探し回しいろいろな虫たちを見つけ大喜びであった。



今年もすでに近くの山の山頂あたりはうっすらと雪化粧が見られる季節になってしまった。殆ど虫たちは朽木や地中に潜ってしまった、地上は寂しくなってしまった。今年も昔に返って「ふゆのむし」を本格的に探しに行ってみたいと思っているが、雪に覆われた野山へ出かけていくのはかなり億劫になってしまい実現できるか、あまり自信はない。

カメラ散歩 第22回 (棚ぼたショット)

スナップ写真を除けば被写体の殆どは昆虫であるが、「生き物」すべてに興味は持っているのでレンズを向けることもある。カメラは殆ど常に首に提げているので、とっさの場合でもどうにか対応できるつもりであるが、百発百中とはいかない。しかし長年のことであるから昆虫以外でも好いショットを少しは持っている。今回はそんな作品の一部をご覧頂くことにした。

数年前安曇野の農道に一面した林の前で友人の車を停めてもらい何かいないかと林へ踏み込み何気なく上のほうを見るとそこは鷺の営巣コロニーであった。高いところにアオサギの姿を認めレンズを向けてシャッターを押したとたんの画像である。たった一回のチャンスであった。



アオサギだけと思っていたら飛んでいるのはちょっと小型のゴイサギ。こんなラッキーはめったにあるものではない。こんなショットを「たなぼたショット」と呼んでいる。その後、上を向いて林の中を歩き回り巣で抱卵しているらしき姿をみつけ撮ったがこのようなショットは鷺の営巣コロニーさえ見つければ得られる。



鳥の美しいすがたの後にちょっと残酷な場面で恐縮であるがこれも生き物の現実の姿であり貴重な場面を捉えたものなのでご覧いただきたい。



70~80センチほどのヤマカガシが手前の大きなヒキガエル(オオガエル)の左腕から呑み始めている様子を捉えたものである。

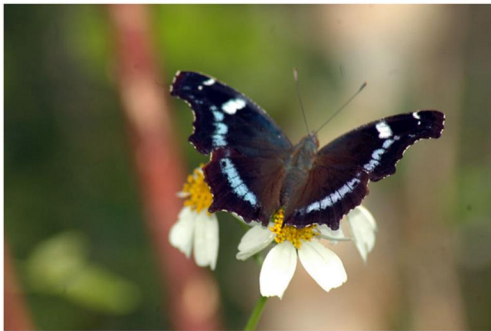
戸隠の中社の境内に人がいなくなると何処からともなくヤマガラが地面に降りてきて、餌を啄ばむ姿が可愛らしく粘って狙っていたがなかなかチャンスが得られず、諦めて境内の隅のほうでめったに出会えない場面に出くわし、得たショットで、これまた「たなぼたショット」である。

安曇野の鷺の営巣地であるがその後行って見たが小さな工場らしきものが建ってしまい林はなくなってしまった。生き物にとっては厳しい時代である。

カメラ散歩 第23回(春の兆し)

2月末に2・3日暖かな日があった。自転車の前を蝶が過ぎった。一瞬ではあったが、ルリタテハであることが判った。季節、飛び方、大きさ、色彩などから判断できる。今年見た初の蝶である。

日本全土に分布し、珍しい蝶ではないが俊敏でなかなか人を近づかせないので、初めて見たという人が多い。



画像は今回撮ったものではない。夏の姿である。全体黒に近いが瑠璃色の帯が美しい。

昨年10月25日、「庭のホトトギスにこんな毛虫が」と妙齢な女性が届けてくださった。電話で色、形などを聞きルリタテハの幼虫だと思うので欲しいとお願いしたのでわざわざ届けてくださった。



全身とげとげで一見恐ろしそうであるが

毒があるわけでもなし、触っても何の害もない。その後間もなく幼虫は蛹になり羽化したので自然に帰した。成虫のまま冬を越し、日中気温が15℃前後になると活動し始める。

この日「ひとミュージアム」へ行って初の蝶を見たと言っていると館長が、そういえば今日部屋にこんな虫がいたと、持ってきてくださった。

カメノコテントウであった。



秋、寒くなって家の中へもいろいろな昆虫たちが入ってくる。寒い間は人目につかぬ物影に隠れじっとしているが気温が上がると動き始め人の目にふれる。

本種は日本で最大のテントウムシで、半球形の直径は11~13ミリ。他の種はおおよそ7~8ミリのものが多い。

食事もちょうと違い、クルミの葉を食害するクルミハムシの卵や幼虫を食べてくれる。

さあ間もなく蛹で越冬をしたモンシロチョウ、アゲハチョウなどおなじみの蝶が現れるようになる。そうなれば本格的な「春」である。

カメラ散歩 第24回(アブ)

菜の花が咲き、タンポポが咲き本格的な春到来。花の咲くのを待っていたハナアブの仲間がやってくる。花にとまって吸蜜しているだけでも充分絵にはなるが、何か行動が伴うと写真としておもしろくなる。



体長 10 ミリほどのホソヒラタアブが菜の花の近くで交尾の状態のままホバリングしている姿である。宙の一点に静止している姿はヘリを想わせる。上下・左右、自由に動き回るのでピント合わせも大変。シャープに撮れているが根気もいるし大いに疲れるショットである。拡大してみると上の個体の複眼に花粉が付いている。

ハナアブの仲間の多くは幼虫時代アブラムシ(アリマキ)を食べてくれるから、植物にとっても我々にとっても有り難い存在である。

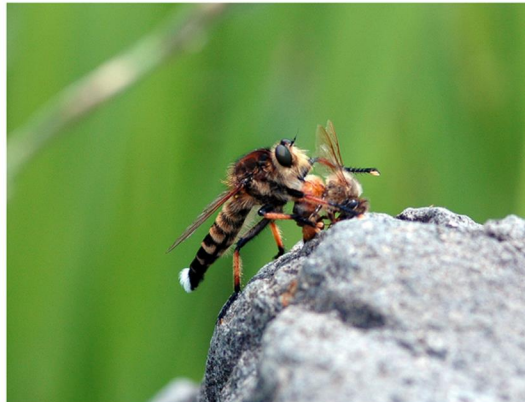
二点目は、たまたまヒラタアブの仲間の一種が産卵しているところを見つけて捉えたショットであるが、アリマキの群れの中に産卵している。卵から孵化した幼虫が、すぐにご馳走にありつけるという子思いの親の姿である。

濃い緑色の小さな虫がアリマキの群れである。

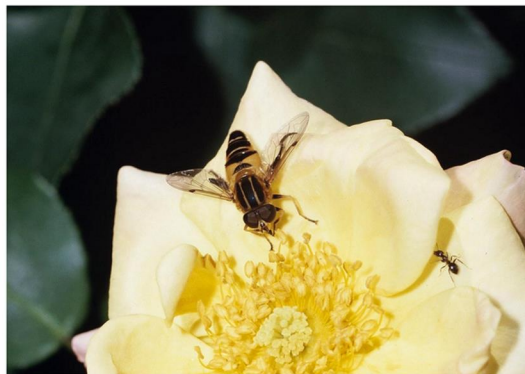


アブもいろいろで、花の蜜を吸うものばかりではない。動物や人の血を吸うグループもあれば、他の虫を捕らえて体液を吸って生きているものもある。

シオヤアブがミツバチを捕らえている。



この場面を捉えた瞬間「虻蜂取らず」という言葉を思い浮かべ一人笑ってしまった。アブとハチを見極めるのは腰で、太いのがアブ、細いのがハチです。(下はアブ)



カメラ散歩 第25回(里山の春)

五月の連休の前と後では気温が急激に変わるような気がする。特に最低気温が連休後は0℃以下になることは殆どない。最高気温は時に汗ばむほどにもなる。

篠ノ井線今井駅まで歩いて3分、冠着駅まで25分、駅を降りれば直ぐ山の中である。標高差は500メートル、しかし平地ではみられない虫や植物に遇える。

便利なのでしばしば冠着へ行く。二人の駅員さんが交代で務めていて一人の駅員さんとは親しく、時にコーヒやお茶菓子でもてなしてくれる。

5月中旬～6月にかけて、ウスバシロチョウという種に間違いなく出遭える。



鱗粉が少なく半ば透き通るような翅で白地に黒いすじの何の変哲もないシロチョウの一種のように見えるが、なんと、これでもアゲハチョウ科に属している。つまり、よく似ているモンシロチョウなどよりもアゲハチョウのグループに近い仲間というわけである。日本では他に、ヒメウスバシロチョウ、ウスバキチョウが北海道にいて、その意味では珍しい蝶であるが、今の季節のみ冠着周辺、他の里山で普通に出会うことができる。

また同じ季節にツマキチョウという可憐な蝶にも出遭える。



同じアブラナ科の花にもよく来る。モンシロチョウよりふたまわりも小さい。前翅の先端が尖って、オスは先端が黄色のが特徴。後翅の裏は青海苔を散らしたようで地味な目立たぬ存在だが、年に一度会うのを楽しみにしている。

やや遅れて出現するクモマツマキチョウという種が存在するが、クモマ（雲間の意）が付く高山蝶で無精者の私は未だ拝んだこともない。

クモマツマキチョウという名前の響きが何とも素敵で中学生の頃から憧れていた当時唯一のカラー図鑑にはその標本写真の採集地として「島々谷」と記されていて、「島々谷」も憧れの地名でもあった。信州へ移り住んで一度行ってみたが、肝心のクモマツマキチョウにはお目にかかれなかった。

今年こそクモマツマキと是非逢いたいと思っているという友人がいて、「雲間」まで車で連れて行ってくれると約束している。その季節が目の前で、大いに期待しているところである。

カメラ散歩 第26回 (鳴く木が欲しい)

この連載もいつの間にか 25 回を超えているのに、改めて調べてセミが一回も登場していないのにびっくり。

セミが嫌いなわけではないし、セミの写真が無いわけでもないが、なぜかおちてしまった。

一番先に鳴きはじめるのはハルゼミであるが、他の種のように市街地にはいないので、姿も鳴声も、なじみはないかもしれない。

六月に里山へ行けば、とりあえず、賑やかな鳴声は聞くことができる。しかし姿は、なかなか見つけにくく、目にするのは難しいかもしれない。



翅は透明で、ツクツクハウシよりやや大きく、ヒグラよりやや小さくほっそり型で木の幹などより枝や梢の先の方に止まることが多く見つけにくい。

鳴声は、ひたすら「ギャア ギャア」と非音楽的な音を発する、しかも近くの仲間がいっせいに唱和するので喧しいほどである。その喧しさが、四、五年前から世話になっている補聴器をオフにすると全く静かな里山に変わってしまうので、自分が思っていたよりも遥かに聞こえていないことを改めて知って愕然としている。

話をセミに戻すが、やがて、我々の住まいの近くで、ニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミの声がきこえるようになるわけであるが、その前に写真の羽化のよ

うすが、虫好きの子どもがいる家庭などでは観察されているかもしれない。



温暖な日本はセミの種類も多く 50 種ほどいる。身近な種でも 10 種くらいは名前を挙げることができるであろう。

鳴声もさまざまである。

北へ行くほどその種類数は少なく、こんなエピソードがある。

戦前のことであるが、ドイツの動物園の園長が上野動物園を訪れ帰られるとき、上野の園長が日本からも、何かお返しをしたいがご希望が有りますか？と訊ねると、笑いながら即座に「あの鳴く樹がほしい」と近くの大きな樹を指差されたとい逸話が残っている。

ドイツは北海道より緯度が北でセミは 2 種いるだけのようだがおそらく南の一部の地域だけだと推察する。だからセミを見たことも鳴声を聞いたこともない人が昔はたくさんいたことであろう。勿論、「あの鳴く樹が・・・」と言われた園長さんは動物学者であるからセミを知らぬはずは無い。最高のユーモアである。

カメラ散歩 第27回(初夏・虫の季節)

梅雨明け前から気温はうなぎ上り、連日真夏日が続いている。7月3日に個展が終りバテ気味ではあったが、6日に栄村、一日おいて飯綱へ出かけた。久々のフィールドで虫たちに出会う楽しみは何にも替えがたい。栄村への主目的はお見舞いと、撮影会の下見であったのでたいした収穫はなかったが、昼間活動する美しい蛾の一種キンモンガを収めた



8日の飯綱の大池の周りの草原で早速出逢ったのがヒメシロチョウ、それほど珍しい蝶ではないが、縁が薄いという長年写真を撮っていて初めてのショットである。



モンシロチョウよりひとまわり小さく、前翅が細長いので、すぐに見分けられ

る。蜜を吸ったり、マメ科のクサフジに産卵していた。

池の周辺にはトンボも多く、シオカラトンボがモンキチョウを捕食しているところを捉えることが出来た。



その後、友人ご夫妻に偶然出会い、湿原に車で連れって行って頂いた。ここでの収穫は、専門分野でないので種名は解らないが、野鳥のヒナが、逃げもせず、比較的近距离で捉えることができた。小型のキツツキのヒナと推定しているが、野鳥に詳しい方がおられたら教えていただきたい。



幼鳥であることは確かだが大きさは、スズメの2倍ほどもある。

帰り道近くの、お宅におじゃまさせて頂き、庭先でこれも初撮りのミヤマハンミョウを収めることが出来た。

第27回 (増補頁)



15 日には二年ぶりに標高 1995 メートルの入笠山へ出かけた。

標高のわりに今年は暑く、小屋から山頂までの標高差僅か 150 メートル登るのに息が切れて大変であったが、山頂の眺望は抜群、東に八ヶ岳連峰、南には、甲斐駒、遠くには、ややかすんでいたが中央・北アルプス連峰。さすが日本の展望台といわれる眺めに疲れは吹っ飛ぶ。収穫は殆どなく、明日に期待。翌朝、小屋を 9 時に出発。

小屋を出たとたんに、大木を縦割りにして横たえただけのベンチに虫を発見



近づけば、羽化したてのみずみずしいエゾゼミであった。

そして車で大阿原湿原へ向う。湿原は木道が整備されていた。

とばくちで、クリンソウの残りの花にアキアカネが翅を休めていた。



6 月頃から里で生まれたのが高原へ避暑に来ているのだ。

暫く木道を行くとおしゃれなミヤマカワトンボを発見、そっと近づき収める。



8 日の飯綱で撮ったカワトンボも、因みにご覧いただこう。



トンボは昔アキツとも呼ばれていた。トンボが多い国という意味で日本を、秋津島（アキツシマ）ともいった。「水」の豊かさを誇れる国である。いつまでも大切にしたいものだ。

カメラ散歩 第 29回

最近、何かと忙しく、カメラが散歩に出られず欲求不満に陥っていて機嫌が悪いがしかたがない。

それでもたまには、身近で出会う昆虫をカメラに収めるためにシャッターをきってやってカメラのご機嫌をとっている。

気を付けて見ていれば家の中にも小さな虫は入ってくる。先日家人に、見慣れない蚊のような虫がいるといわれ、見ると久々に見るトリバガの一種で、あちこち飛び回りパソコンの電源スイッチの上に止まったところを収めた。



翅を水平に開き、胴体とでTの字を作っているが、これがこの仲間の特徴といってもよい。ご覧のように小さく、開いた翅は 15 ミリほどである。

こんな小さな蛾がいるかと思えば大きな蛾もいる。

ヤマユガの類が蛾の中では一番大きく秋の今頃に発生するものが多く、街灯や街灯の下などでよく見つける。写真はその一種クスサン。



前出のトリバガの翅はクスサンの触覚程度とあっていただいて結構。

クスサンは今年北海道で大発生しているようだ。

クスサンの幼虫はご存知「栗毛虫」である。久々に今日は今年 3 回目の栄村へ。北志賀をまわって行った。紅葉は美しく多くのカメラは紅葉を狙っていたが、私の目は小さな虫を探している。しかし、若い頃と違って今は血眼で探す必用も無くのんびりとしたものである。今日の目的の半分であった格別美味な中華料理屋が休みで一同がつくりしていたが、代わりに入ったうどん屋の外壁で美しいカメムシを発見私と欲求不満のカメラはやや機嫌を直した。



写真はツノアオカメムシ

カメラ散歩 昆虫の世界 第30回

3 年ほど前知人に紹介されたご婦人であるが、たまたま、ご主人が筆者の小学校から高校時代までの同級生であった。

その奇遇、そして自然界の生物に関心が高く、特に昆虫より二本、脚の数が多く、クモにお詳しいと言う偶然も重なり、近しくお付き合いを頂いている。

一緒に山歩きをしたり、グループの観察界にもお誘いくださる。そして、しばしば、速達書留で「虫」を送ってこられ、種名、飼い方（餌）について聴いてこられる。

7 月の 3 日の速達書留では、小さな甲虫が 6, 7 匹送られてきた。

菜園のサヤエンドウの中から沢山出てきたと言う事であった。

3 ミリほどの小さな甲虫で肉眼では模様も見えないので蓋がルーペにな



った観察用の容器に入れ覗いてみた。調べるとエンドウゾウムシであることがわかった。

4 匹入れたまま、一週間ほど何も与えずに忘れていたが何故かみな元気なので、驚くと同時に、こんな、しぶとい害虫は困ったものだと思います、ちょっと残酷な実験をしてみることにした。

このまま、水分も何も与えず、どのくらい生きているかと言う実験である。

結果をお知らせする前にこの虫の姿をじっくりご覧になってください。この写真はこの原稿を書いている 11 月 11 日に撮ったものである。

爪楊枝の上を歩いています。

大ききいうより、小ささがお分かりと思います。

体長は僅か 3 ミリの甲虫が湿り気も草の葉ひとつも入っていないプラスチックの容器内で夏の盛りから、今日まで 100 日余を生き抜いています長い長い昆虫の飼育経験の中でも初めての事で、ただただ驚いています。

この小さな甲虫の送り主の 紹介者 もユニークな方で、カマキリを恐れ夏は庭にも出られないとおっしゃりながらカマキリに関する記事などは必ずスクラップしておられその量は驚くばかりです。

結局私はカマキリが好きなのでしょうか？と問いかけられた事があります。

カメラ散歩 第32回

2012年新年号に相応しくおめでたい写真をと思い、生命誕生の画像をえらびました。

ツマグロヒョウモンの羽化の連続写真の中からこの一点という作品を選びました。

真に厳粛かつドラマチックな瞬間です。



カメラ散歩 昆虫の世界（第33回）

今朝も雪で窓からは雪景色、未だ春遠しである。

4月に台湾行きを予定していて、あれこれ調べていると心は既に南国。

台湾の直ぐ近く（200Km）の西表島は毎年のように通っていたが台湾へは行ってない。

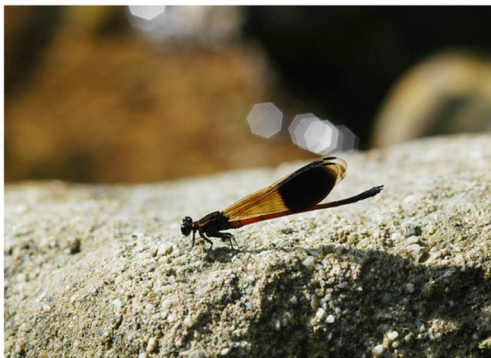
今行かないとだんだん億劫になることはわかっているので来月は必ず行く予定にしている。

台湾は世界的にも昆虫のメッカとして知られている。

西表島とは距離的には僅かであるが島の大きさが比較にならないくらいで、環境条件もかなり異なるようだ。

台湾は圧倒的に種類も多く、今から期待している。

台湾の写真は来月か再来月にはご披露できと思うがとりあえず西表の写真をご覧ください。



それでも西表島は台北より南に位置し、島も小さく高い山も無いので冬季の気温などは台湾より暖かいようだ。

だから一年中花は咲き乱れ、チョウ・トンボ・セミ・など一年中見られる。本州のような四季はないし、ずれも大きく、「二月は新緑がきれいですよ」などと云われ、

びっくりしてしまう。



この三点の写真はいずれも西表の11月初旬であるから、季節感は完全に何処かへ行ってしまう。



台湾は台南へ行くつもりなので初めての熱帯入りになる。

写真は コナカハグロトンボ
スジグロカバマダラの群れ
ヤエヤマアオガエル

カメラ散歩 昆虫の世界 第34回

僅かずつではあるが暖かくなっているようで、あちこちにイヌフグリの愛らしい花が見られるようになった。

しかし、やはり例年よりは寒く今日現在（4月5日）アンズの花がまったく見られない。

例年より寒いことは事実で過去の画像を調べてもはっきり解る。

アンズの花は殆ど毎年撮っているのでアンズの開花期で比較するとよくわかる。過去数年の記録で比較してみると 2004年は4月5日アンズの里は満開であった。アンズの下では水仙が春を謳歌していた。



2005年も4月8日にはアンズ満開の画像があるので前年と殆ど変わらなかった。全ての画像に撮影日がデータとして記録されていて大変便利である。2006年は、アンズの花は二週間遅れの4月19日撮影の画像があった。

そのせいか、2006年は、4月の3日に安曇野へ出かけていた事が画像に記録されている

安曇野は善光寺平より標高が高く 600Mほどあり気温も低めであるが、友人の家族と有明近くの雑木林など散策し成虫越冬のテングチョウをゲットしている。



2007年は八重山へ出かけていてアンズの里へ行ってない。

2008年のアンズ満開は4月10日であった。2010年と2011年は4月頃展覧などで忙しくいずれも杏の里へ行っていない。

こうして比較してみると寒い年と温かな年で2週間のずれが見られる。今年はかなり遅れていることがはっきりしている。

下のような情景が見られるのはいつの事であろうか。



カメラ散歩「昆虫の世界」第 35 回

4 月 10 日から 18 日まで台中と台南へ虫を求めて行ってきた。

台湾もご多分に漏れず開発が進み平地は虫のいる所はないようで、虫のいそうな山地へ入るにはタクシーで 2~3 時間は行かなければならない状況であった。

標高が上がれば台湾でも虫の最盛期にはちょっと早く、会いたかった美しい大型のアゲハ蝶類にはあまりお目にかかれなかった。しかし、収穫がなかったわけではない。台中のプリというところで、チョウの飼育園の中ではあるが、初めて会うトリバネチョウの仲間の一種キシタアゲハをみた。



下翅の鮮やかな黄色が僅かしか見えないのが残念だ。

コノハチョウは沖縄にもいるのだがチャンスに恵まれず、初めてお目にかかった。



擬態の巧みさに改めて感服。

翅を開くと手品のように変身する。



前翅の帯が濃いオレンジ色、帯の周辺は黒褐色、そして全体に見る角度で色は変わり瑠璃色に光る部分もあり真に美しい。カラーでお見せできないのが真に残念。

キシタアゲハは大型、コノハチョウは中型で、目に触れやすく誰にでも見られるが、ちいさなものもいて、ひっそりと生きている種もある。これは興味のない方には目に入らない。



体長 5 ミリほどのハムシの一種と申し上げるしかない初見のハムシである。

次回に続く。

カメラ散歩 昆虫の世界 第36回

台湾へは行く前から蝶の群れの吸水場面を撮りたいと思っていたが、時期尚早、思ったほどの大群には出会えず写真の程度の数で、それも一種類の小さな群れであった。



タイワンウスキシロチョウの群れで、群れの中に、他の種は殆ど見かけられなかった。

昆虫に限らず、自然相手のことである、場所、タイミングに恵まれないことも、しばしばである。

河原の湿った地面の、あちこちに群れているのを見かけたが、いずれも小さな群れで迫力の有る画像は得られなかった。



河原の大きな石には、八重山と共通種のようにであったが、コナカハグロトンボを

見つけて捉える事が出来た。



前翅の先端から後翅の先端まで鮮やかな水色の帯を配したアオスジアゲハは日本と共通種。

勿論これだけが昆虫の収穫の全てではないが、ここで、昆虫から離れて山地門で出会った、先住民族である、ルカイ族のお婆さんの姿が印象的であったのでご覧頂くことにしよう。



流暢な日本語で話しかけられちょっとびっくり。最近の乱れた日本語でなく感動。86歳ということでしたから、日本に強制され、子どもの頃から日本語を使っていたということである。

美味しい蜜豆と同じような甘いものをごちそうになった。

カメラ散歩 昆虫の世界 第37回

友人の誘いで約60年ぶりに冠着山（姨捨山）へ登った。といっても最近はかなり上まで車が行き、最後の1キロ程度の登山だから、楽々であった。

ふたつのグループが登山口の駐車場、集合という事で、駐車場で暫く時間があり、早速、目は虫探しの眼になる。目が慣れてくればいろいろ見えてくる。



まずバッタが目についた。可愛らしい姿であるが、種名を調べるのは大変難しくいつも難儀している。幼虫と成虫で違い同じ種でも色彩・柄など、いくつかのタイプがあったり、専門家以外はあまりはっきり同定はできないので、山野に棲むバッタの一種としておくしかない。

暫く道に立ち止まっていると、同行者の靴の周りにまとわりつくように、蝶が一匹。じっくり待っていると翅を広げてくれた。

山地、高原に棲むクジャクチョウ。その名前の通りの華麗な蝶で高原のアザミ、



秋のマツムシソウなどに集まってくる。しかし、時には写真のように人の靴や、肌にとまり、汗を吸うこともある

林の中に入ると、耳を聳するばかりにエゾハルゼミがギャーギャーと非音楽的な大合唱。しかし姿はなかなか見せない。

山頂ちかい急な道をゆっくりと、下草に何かいないかと目をやりながら、息を切らせながら登る。山頂まで1.2kmと判っているのに気持ちにゆとりはあるが、蟬時雨ばかりで、情けない事に虫を見る余裕がない。

そうこうしている間に山頂へ着く。山頂は既に他のグループが到着していて、子供たちの声で賑わっていた。

60年ぶりに見る山頂からの善光寺平、感慨一入である。

天気もよく、眺めの良い山頂での昼食をいただき、子供たちは今日の収穫を見せ合ったり、大人たちの顔も子供に帰ったようである。

私には見つけられなかった、エゾハルゼミだが、山頂の下草や樹の低いところで子供たちがいくつも見つけてきた。

帽子に止まらせたり、洋服に止まらせたり、ひとときを楽しみ、又二手に別れそれぞれに下山した。



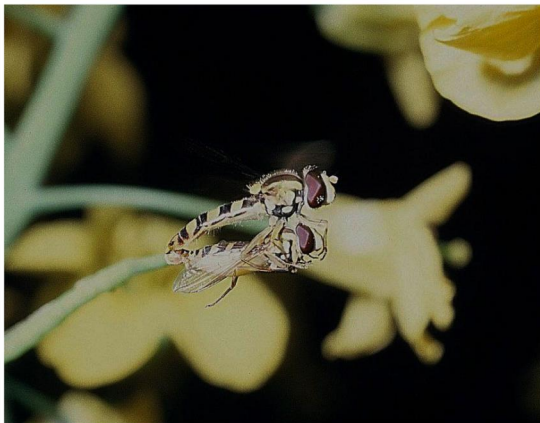
カメラ散歩「昆虫の世界」第 38 回

昆虫の写真を撮る事を生業にして 50 年になる。私のファイルには昆虫の飛んでいる姿を捉えているものが少ないことに気づいた。これはひとつには、反射神経が鈍いこと、そして、撮り始めた 50 年前のカメラでは殆ど不可能に近いテーマであったことに起因しているように思う。従ってこれだけメカが進歩した現在でも、端から飛んでいる昆虫にカメラを向けようとする意欲が殆どおきない。

しかし、時にはラッキーなこともあり、カメラに収めたこともある。

飛んでいる姿といっても、ホバリングしているものは比較的捉えやすい。

下のヒラタアブなどは、小さく大変な被写体であるが、しばしばホバリングしてくるので捉える事が出来た一点である。



菜の花の近くで交尾したままホバリングしている姿だが、欲を言えば背景の、菜の花がないと良いのだが、なかなか理想的な条件は巡ってこない。

次のショットは、かなり際どいショットでやはり幸運といってよいであろう。

ルリジガバチという狩をするハチが蜘蛛の巣にいる蜘蛛を襲って捕らえ、飛んで巣へ運ぶところを偶然捉えた中の一点である。



今回は「飛ぶ」が、テーマであるが、因みに、ルリジガバチが蜘蛛を襲っている場面もご覧下さい。捕らえた蜘蛛に麻酔注射をしている瞬間です。



最後の一点はトンボ。



トンボの語源は「飛ぶ棒」とも言われているが、否定している言語学者もいる。

否定の理由を読めば、それはそれで肯ける点もあるが、写真は正に「飛ぶ棒」である。

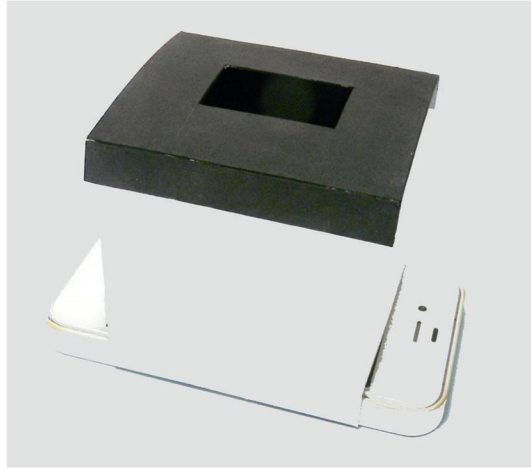
カメラ散歩 昆虫の世界 第39回

昆虫の接写を始めたのが 50 年前、国産の一眼レフが誕生したばかりの頃で、当時はまだマクロレンズもなく、昆虫のような小さなものを撮るのは大変なことであった。昆虫の中では大きなアゲハくらいは、さして苦労はなかったが、カメムシ、テントウムシほどになると、仕掛けが大変になる。下の写真は超クローズアップを撮るための仕掛けで重さは 2 キロもあるので機動性に欠ける。今では考えられないしろものである。

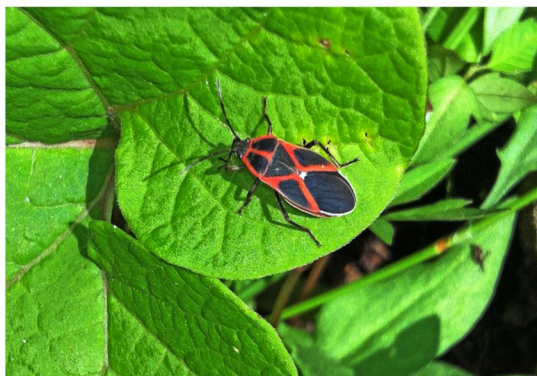


40 年後にはデジタルカメラが実用のレベルに達し、その後の進化のスピードは速く、こちらが追いつかないほどである。昨年（2011 年）7 月号で、入手したばかりの I phone で撮った写真をご覧頂き、その性能の良さをご紹介しましたが、それから 1 年 3 ヶ月、I phone で、昆虫たちの接写作品も、大分ふえてきました。この冊子がお手元に届く頃第 5 回の「まほろば展」が開かれるので、そこで、カラーの大きな写真でご披露したいと考えています。楽しんで頂けると幸いです。現在 I phone 用に、接写レンズなども別売されていますが、接写レンズは今のところ使用せずに撮っています。

一眼レフ以外のデジカメや携帯の弱点は、野外では明るすぎて画面が見にくい事である。そこで、ひと言で云えば、下の写真のような「暗箱」を作り、見やすくして使っている。



小さな虫を捉えた 2 点見てください。



11月12月と病気のため休筆いたしました
が、幸い軽く、復帰できましたので、また
続けさせていただきます。お付き合い下さい。
寒い冬の間、撮りためた画像の整理をする
ために、凡そ月ごとに整理されているファ
イルを覗き、昆虫だけ抽出し、昆虫だけの
ファイルに、分類して納めていきます。そ
んな整理をしているとき、時々気になる画
像にぶつかり、拡大したりして克明に見て
思わぬ発見や、掘り出し物があり、嬉しい
のですが、それについて調べごとが、それ
からそれと出てきて大変時間をとってしま
うことがあります。

今日の掘り出し物はこの画像です。



アカスジキンカメムシといって体の筋模様が赤色、地色が、本来は濃い金緑色なのですが、この固体は真っ黒なのです。

昆虫の体色は、同じ種類を多数集めて色の濃いものから薄いものを並べると、きれいなグラデーションができます。両極端の色彩の2匹だけを見ると別種ではと思えるほどです。

このカメムシはアカスジキンカメムシと名づけられていますが、アカスジクロカメムシと言ってもよいくらいの黒化型で、初めての出会いで私にとっては珍品です。

同じ日付のファイルに、よく見ると、見慣れぬ虫の姿がありました。



撮った時点ではカミキリムシの一種と認識していませんでした。今日まで種名を調べてもいませんでした。ヤツメカミキリといって、フトカミキリというグループに属している事が分かりました。そういえばちょっと太めな体が、私の目をカミキリと認識させなかったわけです。

サクラ、ウメの木にいと、記載があり、そう珍しいものではなさそうなのに、私にとっては、はじめての出会いなのです。50年以上もムシの世界に携わり、身の虫の写真を専門に撮ってきているのに、こんな事もあるのです。

先のカメムシを撮ったのが7月4日14時16分と記録にありその前が14時6分でこんな画像がありました。これも今日見て初めて気付いたので、自分の迂闊さにあきれてもいます。



見慣れているカメムシ（ナガメ）を撮ったつもりでいましたが、どうやら初顔の虫が、カメムシに覆いかぶさり襲っているようです。襲っているのが、何に属する昆虫かさえ未だ分かっていません。

カメラ散歩 昆虫の世界 第41回

前回の貴重なファイルを掘り出したのは2012年7月4日のものでした。

暫く撮影地も思い出せず家人に日誌を調べてもらったが、記録が無く困りました。

もう一度丹念に調べ、その日の最初の画像を大きくして、わかりました。それが下の画像です。



車から降りた瞬間にこのチョウの色彩が目に入り追いかけたことを思い出したのです。

アカシジミと言いますが、よく考えてみたら、これも私のカメラには初めて収まったものだったのです。

このシャッターを切った時間が14:00と記録があり、最後が16:06と記録されていて2時間6分の間に26コマ撮影していたことがわかりました。



これも大きくして判った事ですが種名はオオクチブトカメムシ。なんとこれも私にとって初物だ

ったのです。肉食のカメムシです。

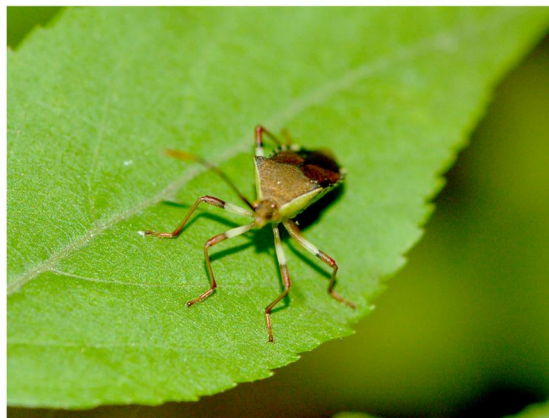
サシガメという肉食のカメムシはかなりいて、姿がいわゆるカメムシとちがいます。

皆さんが良くご存知の、臭いカメムシしが、いわゆるカメムシ型で、殆ど植物の、葉、茎、実から汁を吸っていて、肉食のものは、少ないのです。この最初と最後のカットはいずれも1カットのみです。普通チャンスが続けば1カットだけというのは考えられませんから、シャッターチャンスが一度だけだったと言う事でしょう。

2時間6分で、26カット、15種の昆虫を捉えていましたが、なんと初物が5種、40年ぶりの再会が一種という効率の良いカメラ散歩でした。

これが直ぐ近くの朝日山です、この山へ入ったのも60年ぶりのことでした。

40年ぶりの再会のカメムシはマユミ、ニシキギに普通に見られる珍しいものではありません。でも何故かめぐり逢えない事も、あるものです。



朝日山には、地元の小学生が大切に保護してきたカタクリの花の群落が5・6月ころ咲き、ヒメギフチョウが飛来するということを聞きました。今年之行ってみたいと思っています。

ご縁があれば私のカメラにも収まってくれるでしょう。

カメラ散歩 昆虫の世界 第42回

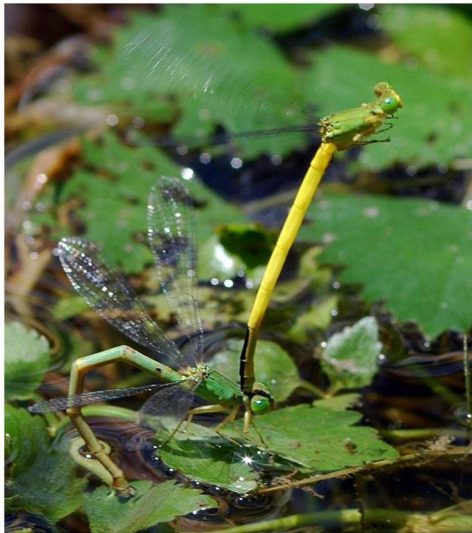
水温む春、池などで一番先に見られるのは、トンボの中ではイトトンボの類であろう。



それぞれの地方で呼び方は違うようだ。筆者は子どもの頃トースミトンボと呼んでいた。

トースミは「灯心」（灯を点す細い芯）からきているようだ。

小さいが美しいものも多く、池のふちの草などにとまっているので、子どもたちにも馴染みやすいのかもしれない。



キイトンボが産卵している状態であるが、こんな姿は皆さんも見たことがあるでしょう。イトトンボが現れる前に水面にはアメンボウ

の姿がみられます。その頃になって「水温む」が実感として得られ、うきうきとしてまいります。



誰にとっても春は待ちどおしい季節です。

「水温む」この季語の句は多く、ネットから以下にピックアップしてみました。

「鷺烏雀の水もぬるみけり」一茶
「芹目高乏しき水のぬるみけり」子規
「犬の舌赤く伸びたり水温む」虚子
「水温むとも動くものなかるべし」楸邨
「餌終えし鴨すげなきや水温む」汀女
そして最後に

「水温む鯨が海を選んだ日」土肥あき子
この、時間的にも空間的にも非常に大きな句に出会い嬉しくなり、皆様にもご鑑賞頂こうと、ご紹介しました。

カメラ散歩 昆虫の世界

カメラを肩にフィールドへ出かけることは大変楽しい。なかなか虫が姿を見せない、或いは、見えてこない時もある。

そんな時はどうしても小さな虫にまで目が行くものである。



名前はオオヨコバイであるが、体長は8ミリほどの小さな虫である。普段は見過ごしがちであるが、こんな時の収穫になる。

判りやすく言えば、セミに近い親戚で草の汁を吸って生きている。人には聞こえぬ音を出していると考えられている。

薄い水色の地色に少し濃い色の縦縞模様が美しく、可愛らしくもある。

関心を持っていなければ、見えてこないが、草むらには、いろいろ棲んでいます。



春の花の花びらを食べて育つキリギリスの幼虫もよくみかけられます。今は13ミリ程度ですが

脱皮を重ね大きくなり、5回目の脱皮で翅を持ち成虫ということになります。

少しも珍しいものでなくても、皆さんには珍しく初じめて見るというものもある。下の虫も。そんな一種でしょう。



長翅目・或いはシリアゲ目といわれている、4～5種ほどしかいない、小さなグループです。尾端にサソリのような挟をもっています。昆虫の系統樹を見ると、蝶や蛾と共通の祖先から生まれています。小昆虫、小動物の弱ったもの、死体などの体液を糧にしています。



初めにお断りしておくが今回は昆虫の話から脱線するがご容赦下さい。

友人知人に、著名な俳人、アマチュアの俳句愛好家、一茶の研究家など多く、俳句に親しんできたが、俳句を楽しんでいる友人とは15年も前から、彼の送ってきた俳句に筆者の写真を付ける遊びをやってきた。

今でこそ、テレビ、新聞紙面でフォト俳句と称して盛んに行われているが筆者と友人の方が始めたのは早かったと誇っている。

そんな中の2〜3ご紹介してみようと思う。

友人Sがある時からかなり頻繁に俳句をメールで送ってくるようになり、そのうちに、絵葉書を作りたいから写真をつけて欲しいと、云ってきた。ちょうど今頃の季節であった。

「耳鳴りにしてはオシャレな蟬時雨」木石
この句につける写真は一瞬で決まった。



上の写真と俳句をハガキにレイアウトして送ったところ大好評であった。

写真は安曇野に遊んだ折、神社の境内で弁当を済ませ草むらにひっくり返って撮ったもので誰でもが一度は撮るようなスナップ写真である。

「蟬時雨が聞こえてくるようだ」と褒められたが、実は撮った時、まさに蟬時雨がきこえていたのです。

もう一句続けてまいります。

「蟲の音にナースコールを聴く夜かな」木石
この句はちょっと写真に困るのではないかと木石氏は私が困るのを想像して楽しんでいたようであるが、句に付けられた下の写真を観て

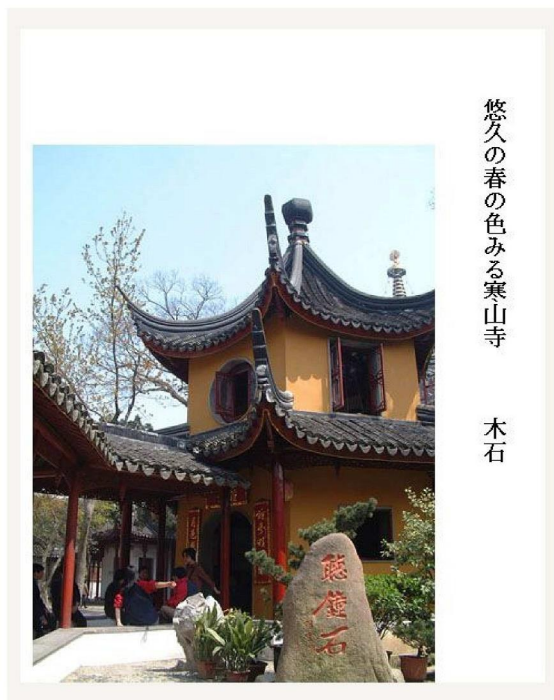


藤城誠治の切り絵ではないかと思ったようだ。

写真はクツワムシのシルエットだが、彼は、藤井の撮る写真は昆虫を真正面から捉えた作品しか考えられなかったらしい。確かに生態写真としては使えないショットである。

これも好評で暫く続け楽しみました。彼は難病で年二回、一ヶ月くらい入院生活をするので旅は煩わしいようだ。

そこで、今度は旅の画像を送って、それに彼が俳句をつけるという逆も楽しんでみた。



悠久の春の色みる寒山寺

木石

病後初めての夏、カメラを提げて出かけた。熱中症の情報など聞くとちょっと恐ろしくもあるが、虫の写真を撮るには暑い盛りに野外へ行かなければならないのは宿命で避けるわけには行かない。

聖高原まで電車で行き、後はタクシー。15分ほどで麻績村の施設シェーンガルテンのレストラン前に横付けされるが、ここで冷房の快適なレストランでコーヒーなど飲みたいが、ぐっところえて、背を向け花壇や植え込みのある傾斜面を下っていく。

草むらでは、キリギリスが頻りと鳴き、木の上ではあちこちからエゾゼミの声が聞こえ暑さに拍車をかける。

草むらのキリギリスをこちらが先に見つけることは不可能で、逃げられる。蟬も抜け殻だけは沢山見るが肝心の蟬は姿を見せない。

オオムラサキが滑空して林の中に入ってくるのを目の端で捉えているが、なかなか木にとまらない、今年は蟬も多そうだが、マイマイガ（ドクガ科）の毛虫が、多く目立つ。



ドクガ科に属すがドクガのような毒毛は無いといわれていたが最近被害の届けがおおい

という情報もある。こんな毛虫はご用心。

オオムラサキが飛び回る木の下に入って暫くじっとしているとちょっと高いところだがとまってくれた。



お紫の季節は過ぎていると思っていて全く期待していなかったが、季節が遅れていてぴったりのタイミングのようで新鮮なオスの固体を捉える事ができたが、残念ながら美しく紫に輝く羽の表を見せてくれなかった。日本最大の固有の種で国蝶になっている。見慣れぬ木なので種名の木札を見ると、アメリカザイフリボクとあり、バラ科に属するらしい。

カミキリの幼虫が材部に入り木を傷め、そんな傷の付近から樹液が出ているようであった。

カメラ散歩昆虫の世界 第46回

松江在住の旧友がギャラリーをリニューアルしたから個展をやらないかと、確か昨年5、6月頃誘ってくれた。

しかし、あまりにも遠方なので、返事を保留そのままになっていたが、この春、病気回復を機に、する事に決めた。会期は9月1日から16日までと決まったので、6月下旬、3泊で下見、7月の初旬から準備を初め、無事漕ぎ着けた。事前の飾り付けを含め5泊の予定で再度松江行きになった。

そのギャラリーは松江市内ではあるが繁華な中心から数キロ南、未だ田んぼや畑が見られる所で、彼の家の屋敷内にあるが、その屋敷自体が古墳群の中に位置している。

個展の際いつもその会場の地域に住む昆虫たちの姿を例え1点でも2点でも飾るよう心がけているので今回も下見に来たときに、その予定をしていたが、予定していた日強風で写真には全く不向きな条件で得るものがなかった。

しかし下見に来て着いた日の翌朝出雲大社へはご挨拶に寄っておこうと出かけて行った時、境内で思いかげず虫の姿を見て抑えてあったそのうちの一点が下の写真オオゾウムシ。

オオゾウムシはグループでは最大である。と言っても体長20ミリ程度であるが、同類のオト



シブミなどと比べると大変立派である

多くの甲虫は、人が見つける前に、先に人の接近を感知、そのとたんにポロッと地面に落ち姿を隠す。地面でも草むらでも落ちてしまったらなかなか発見するのは難しいので、それほど珍種ではないが、お目にかかることは少ない。

出雲大社神楽殿の長さ13メートル、胴回り9メートル重さ5トンの巨大な注連縄を横目で見つつ又歩き始めた。早朝の7時というのに参詣



の人の多さにも驚きながらなるべく人の少ない方角へ離れて行った。

トンボが地上低くもたもたしているのによく見るとトンボを捕らえていた。そっと静かに追いかけて、建物の基礎コンクリートの所でおちついたもので、これも23回シャッターを押して捉えておいた。

トンボがトンボを咥え、朝日による翅の長い影が本物の翅と複雑に交錯し解りにくい絵柄になってしまったが、ながーい影が面白い。

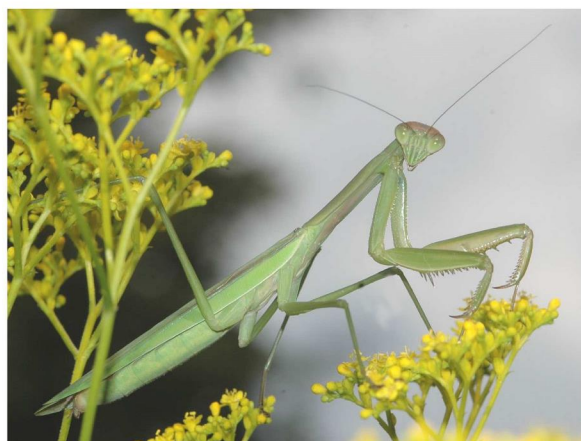
カメラ散歩 昆虫の世界 第47回

昆虫は子どもたちの興味をひくので、さまざまな虫たちが童謡に歌われている。

カマキリも、 かまきりじいさん いねかりにかまをかついで あぜみちを・・・といった歌詞の歌があったことを思いだし、今も唄われているのだろうか？とネットで調べてみると、まだ保育園、幼稚園などで唄われているようで、ほほえましく思ったが、メロディーが浮かんでこない。代わりに、あきのむし、アカトンボなどなどのメロディが耳の底を流れてきた。

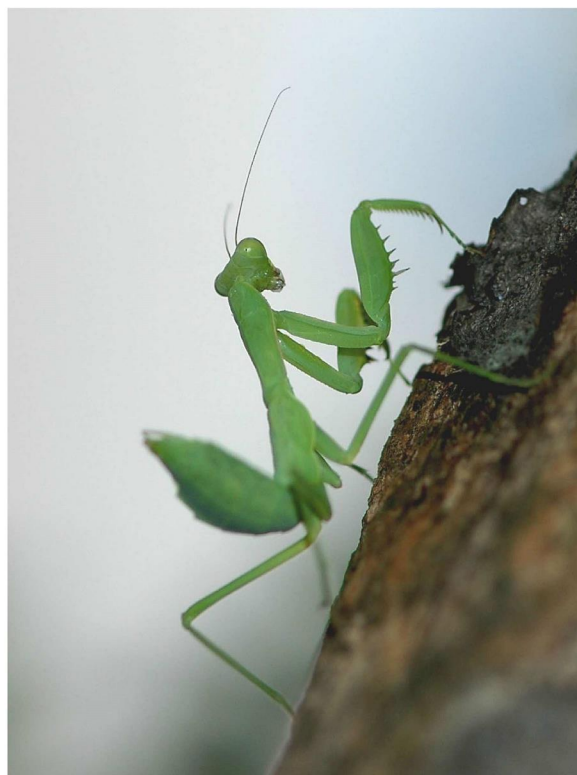
さて、カマキリであるが最近ではめっきり減ってきてその姿がなかなかみられない。寂しい限りである。

ごく普通に見られたのは以下の4種である。



上のオオカマキリとチョウセンカマキリは大きさが殆ど同じ、体色に緑色、褐色のタイプがあることまで同じで見分けにくいですが、ここでは細かい事は省きましょう。

次の2種は小型で前種の半分くらいでしょう。



上が、ハラビロカマキリ下がコカマキリ。ハラビロカマキリは腹を上を持ち上げている。コカマキリは濃い褐色タイプが殆どで、緑色タイプは稀である。

4種全ての姿をご紹介しますだけでスペースがなくなってしまったので、もう一回続けてカマキリを取り上げたいと思います。他の昆虫と違った、かなりユニークな特徴のもちぬしでもありますから次回ご紹介したいと思います。

カメラ散歩 昆虫の世界 代48回

前回に続きカマキリです。

ご承知の通りカマキリは生餌を捕らえ、強い力を持つ両の鎌で獲物をしっかりと捕らえ齧りつく。

そんな場面を電車から降りてすぐに発見、やや斜め後ろからそっと近付くと、獲物をしっかりと鎌で確保したまま、食事を中止して、顔だけで振り向き、こちらを睨みつけた。この形相は、カマキリを嫌い恐れる人にとっては背筋に冷たいものが走るという。



写真のオオカマキリはどぎつい色彩の、臭そうなツノアオカメムシ捕食の場面である。

嫌う人は多いが、この豊かな表情が他の昆虫にはないので、私にとっては絶好の被写体で、さまざまな表情は魅力的でさえある。

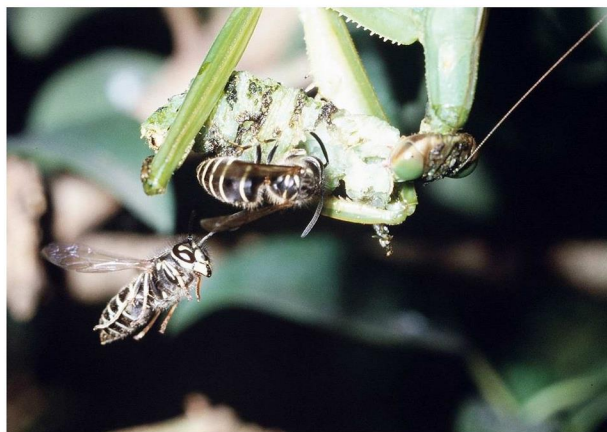
沖縄でパパイヤの家叢に隠れ吸蜜に来る虫を待ち構えていた、ハラビロカマキリが蛾の一種を捕らえた瞬間を捉えたが、未だ口をつけていない。どうも蛾は粉っぽくて苦手だという、表情にも見えるが、後に食べてしまったように記憶している。



カマキリは動くものに敏感に反応し瞬間的に鎌を伸ばし捕えるのでとんでもない大物を捕えてしまう事もある。

下の写真は大きなイモムシを捕らえ、暴れられてこずったが強い両鎌の力で押さえ込み、食べ始めたが、暫くして、そこへクロスズメバチが現れ、イモムシの肉を失敬していくではないか、この時カマキリの鎌は獲物を放すことができないから、クロスズメバチの横領をとがめる事ができず、なされるがままであった。

暫く見ていると、仲間に知らせたのか、クロスズメバチが次々と現れ、ほしいままに横領を重ねていく。ちょっと気の毒になったが、しかたなし。



被写体として昆虫には十分な魅力があるが顔の表情に乏しい、中で唯一カマキリは表情を持っている昆虫であると前回に記したが、鳥類以上の生き物になると表情は豊かになる。

哺乳類になれば、身近なペット犬・猫の例を挙げるまでもない。

比較的近くに茶臼山動物園があるので、しばしば覗きに行く。虎やライオンなど大型哺乳類の魅力にも惹かれるが、表情と言う点では、霊長類に及ばない。

つい、サル山や、オランウータンの檻や、遊び場を覗き、彼らの豊かな表情に惹かれ話しかけてみたりして遊んでくるが、ここまで人類に近付いた動物になると、鏡を見ているようで、興味は尽きない。

あるとき、上の方で遊んでいたオランウータンの一頭が、するすると降りてきて、私の前にぴたりと座り、じっと見つめ、動かなくなった。

かなり好意的な表情でもあるので、私も動かず、好意的な顔で見つめ合っていた。

やがて、その様子を見ていた他のお客さん達がくすくすと笑っているのが判ったが、見つめ合いは続いた。



別れ難かったが、そっと立ち去り、秋になって再び訪れてみた。

広い檻のうえのほうに遊んでいたが、私を認めるとやはり降りてきて、今度は綺麗な紅葉を拾い長い手を伸ばし私にプレゼントしようとしたが、檻につかまっているので手が伸ばせないでいる。

その瞬間を家人が撮ってくれていたがよい

出来とはいえず、よく判らないかも知れぬが下に載せておきました。



檻から出している彼女の手のひらに紅葉が乗っているのが辛うじて判るがちょっと厳しいかな？

とにかく好意を受け取り、ポッケに大切にしまって、後ろ髪引かれる思いでそこから離れ別れた。

ほのぼのの場面に居合わせた他のお客も笑顔と、中には拍手を下さった方もあった。

間もなく寒い季節になり、ついご無沙汰になり、翌年春、期待半分、不安半分で出かけて行って、ウータンの折の前に立ったが中で仲間と遊んでいる彼女から全く無視されてしまった。

失恋の痛手は大きく立ち直るのにかなりの時間を要した。

写真でご覧の、熱き視線は今でも忘れる事が出来ないでいる。

来春暖かくなったら久々に行ってみようかと思っている。

虫のいない季節なので、ちょっと虫から離れてみました。



後記

昆虫の生態写真を撮って50年を超えましたが、何しろ種類数が地球上で最も多い連中で、日本だけの話でも、蛾だけで5千種甲虫も同じ程度います。その他セミカメムシ、バッタカマキリ、などなど際限なくいますので飽きる事ありません。昨年ですら多くの初顔に出合っているくらいで何回生まれ変わる事が出来るとしても撮りきる事は出来ません。

東京から信州へ移り住み既に17年が過ぎました。この17年間だけでもお見せしきれぬほどの写真を収めております。せつかくの収穫ですかなるべく多くの作品を観ていただきたいので後の残された時間は、作品集つくりと、展覧会を目標に行きたいと思っております。よろしくお願いいたします。